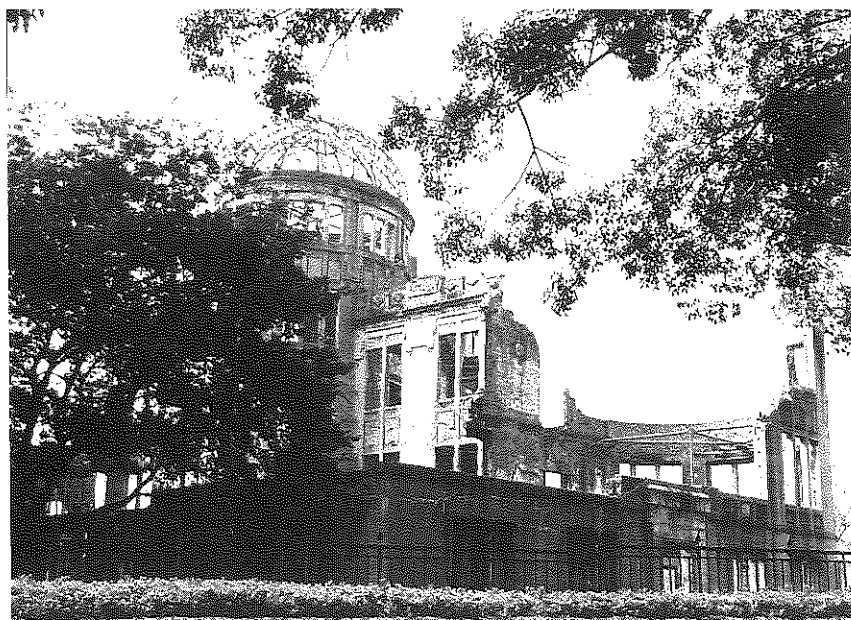


舟入むつみ園

一般養護



原爆ドーム

患者と共に避難

安井 松 恵（八四才）

被 爆 地……基町（爆心地より〇・七km）・屋内
当時の急性症状……体中に紫斑・下痢・発熱・脱毛・歯ぐきの出血
家族の死亡……なし

被爆前の家族構成と当時の生活

父新蔵は国鉄に勤務しており、信号機を作動させ列車の入れ替え等の仕事をしていました。母は、子どもが多かったので家事等をしていました。三男五女の八人兄妹でした。私は陸軍病院で看護婦をしており、長兄は戦死、次兄、三番目の兄は軍隊でした。二人の妹はそれぞれ結婚していましたが、四女・五女は幼かったので今では記憶にありません。

被爆時の状況

私は当直明けて、投下時刻は見廻りのため、陸軍病院内の病室へ行って患者と話をしていました。木造の建物が倒れて頭を打ちましたが、ひどい外傷はなく、患者と共に土手に逃げ、その夜は川堤で

野宿しました。町の様子は見る陰もなくあわれに、あつちもこつちも建物は倒れてしまつて、なさけなくつてどうしようかと思うばかりでした。

被爆後の行動と生活

投下後、翌朝、白島の長寿園へ行き、トラックで戸坂小学校へ避難しました。その後、矢賀の鉄道官舎まで歩いて行き（妹宅）、泥と汗で汚れた白衣を着替え、南蟹屋町の自宅へ行きましたが家が壊れていたため己斐まで歩いて行き、草津の大崎方（妹宅）へ身を寄せました。陸軍病院の残務整理のため、草津の妹宅より基町まで通っていましたが、抜毛、身体中の紫斑、下痢、歯ぐきからの出血、発熱の症状が出ました。

ホーム入所前後の状況

昭和二三年頃から煙草店を開いて自活しておりました。現在の新幹線ホームの下の場所でしたので立退後、代替地として本線と新幹線との間に土地をもらい移転しまして、煙草店を続けました。

だんだん年をとつてくると心細く夜眠れないくらい不安になりました。気管支ゼンソクも症状が重くなり鉄道病院へ入院しました。

退院後は一人暮らしが無理になったので煙草店は姪にまかせて、昭和五九年六月一八日退院と同時にホームへ入所しました。気管支ゼンソクの発作がひどく原爆病院へ入院しましたが現在は病状も落着きました。大きな声で歌うことが好きで、星影のワルツや北国の春をテープに吹き込んでもらい、

毎朝自分の歌声にあわせて歌い楽しんでいます。

悲惨な光景

浅野 恵 就（七一才）

被 爆 地……堺町二丁目（爆心地より〇・八km）・屋外

当時の急性症状……発熱・脱毛・齒ぐきの出血

家族の死亡……なし

被爆前の家族構成と当時の生活

昭和一七年九月より、三菱重工業広島分工場広島製機製作所に勤務し、祇園町八木に住んでいました。

私が二六才、妻と男の子二人の四人家族でした。

三菱重工業に入社する前は、大阪市役所に勤務していました。戦争がだんだん厳しくなり深刻になってきたので、大阪のような大都市においては危ないと思い広島に帰り、職をもとめて祇園にあった三菱重工業に入社したのです。

被爆時の状況

八月六日の朝早く、天満橋東詰堺町二丁目周辺に建物疎開のため三菱重工の社員三五〇名が集合していました。空襲の被害を少なくするためということで、毎日三五〇名が建物疎開に出されていたのです。

六日は上天気で、朝早ばやと集まった所は大きな広場でした。そこに一戸だけ二階造りの家が残っており、そこに三五〇名の者が弁当箱と水筒を入れました。

就業にはまだ早いので一服していました。その時ピカッと光が走り、爆音と同時に爆風が吹き荒れました。その時私は西向に座っていたので、東からの爆風で前方に転び額を強く打撲しました。ちょっと目を開けて見ると真黒です。今まで上天気であったのが、黒煙がもうもうと立ち昇り、周囲も空も真黒い闇夜のようなのです。私はもうだめだと思い、合掌しました。

私は広島市の中心部の地形がよくわからないのでどこへ逃げてよいかわからず、思いきって防空壕に入りました。その時悲惨な光景が目の前で起きました。家々がみなペチャンコにつぶれ、その中から「助けてくれー、助けてくれー」「うーん、苦しいよー、苦しいよー」「お母ちゃん助けてー」等々、子どもが助けを求める声、声、声。また、人々が助けをもとめ、苦しみで唸る声、声……。破壊した家の下敷になり動きのとれない人々の叫び声、唸り声が続きます。でも、どうしようもできない様でした。悲しみの極みでした。

助けをもとめる声がいっぱいの中で、そこそこで火事が発生し、やがて大火になりました。体中や

ケドで川へ飛び込む人、倒壊した家の下敷になり生きながら焼死した人、そのような地獄絵のような状況を見て、私は体のふるえがとまりませんでした。

防空壕の中でしばらくじっと我慢をしていた私は、体中ヤケドで川へ飛び込む人たちを見て、怪我をしていない自分に気付きました。二階建の家の影で休んでいて直射を受けていなかったからだろうと思います。

あれだけ晴天であつたのに、夕立ちが来て大雨が降りました。仲間が散り散りばらになり、時間ばかりませんが私も一人でとぼと家のある祇園町八木をめざして歩き出しました。祇園までは四キロはあると思いました。

疲れて道端へ座り込んでいますと、母親と幼女がとぼと歩いて来ました。母親が「この子が大木の下敷になり、助けようとしても私の力では大木が動かない、何度も何度も持ち上げてもびくとも動きませんでした。それが、最後に祈るが如く渾身の力をふりしほり大木を動かしたら上がり、この子が助かったのです」と話されました。

私はこの話を聞いて、人間の一念の強さ、母性愛の尊さで、奇跡的な力が湧いたのだと思いました。今でも忘れることができません。当時のことがまざまざと目に浮かび思い出されます。

被爆後の行動と生活

八月六日の日暮れ時、祇園町八木の家に帰り着きました。家族は私が帰らないので諦めていたそうです。妻と二人の子どもは無事でした。

それから一週間というものは、食欲がない上に体調も悪く、薬もないという状態でした。郷里の岡山県倉敷市近在の田舎で兄が農業をしていましたので、兄を頼って親子四人が帰りました。それは被爆より一〇日くらいたってからでした。

兄のおかげで食糧は多くありましたが、どういうわけか喉が詰まって食べられない状態で食欲がありません。頭髮が抜けて丸坊主になりました。齒ぐきから出血し、四〇度の熱が出て頭がボヤーとしたり、激しい頭痛で体は衰弱するばかりでした。兄がリヤカーに乗せて六キロの道をひっぱってくれて、倉敷の中央病院に入院させてくれました。親戚、知人一〇人の方より血を頂き輸血してもらい、命びろいをさせて頂きました。十一月頃やっと歩けるようになりました。人の情に頭が下がり、生きるよろこびを覚えました。

昭和二十一年正月が明け、岡山県から、元の三菱重工業へ戻って来ました。月給が九〇円でした。当時小学校の校長先生の月給が一二〇円くらいでしたので、二〇代の月給としては良い方だと言われましたが、私は三菱重工業を退職しました。

その後は、倉敷で化粧品を仕入れて来て、妻が売って歩くという商売を五年間続けました。この商売は結構儲かり幸運でした。

ひどく重い病気をしまして生命がなくなるような状態にまでなった私ですが、その後もいろいろな病気はしましたが、入院したということはありません。足に「できもの」がよく出来、それがなおらないのです。また、その「できもの」は痛くないので不思議でした。

やがて時がたち、真言宗の信仰の道へ入り、修行の半生を送りました。

心臓が悪くなり、七、八年間日赤病院へ通院加療しましたが、体調思うにまかせず、希望して平成元年五月一八日、広島原爆養護ホームに入所しました。

ホーム入所前後の状況

現在このホームに入所し、皆さんに親切にして頂き、今はこの世で一番幸せ者だと感謝しております。

修学旅行の生徒さんが来所され、私が被爆体験を話して、どこまで理解して頂けるかわかりませんが、私は学生さんたちに別れの時、戦争だけは決してすべきでないこと、また、女生徒さんには、母親は子どもを母性愛を持って育てることが大切であると強調いたしました。また、現在の平和の尊さも強く強く話し継ぐべきだと心しております。

空は真赤に燃えていた

橋 本 新太郎（八六才）

被 爆 地……大手町（爆心地より〇・九km）・屋内

当時の急性症状……下痢・発熱・脱毛・歯ぐきからの出血・嘔吐・腕打撲・手指切断

家族の死亡……姉

被爆前の家族構成と当時の生活

当時、私は四一才で、母八九才、妻三九才、子どもがいないので一中に通学していた甥との四人暮らしでした。

自宅は荒神町でしたが、愛宕町で八百屋をしていました。野菜の仕入れも困難で量も少なく、行列をして店の前で待っている町内の人たちにわずかずっしか売れない状態でした。

毎日リヤカーを引いて汗を流して仕入れに通ったものです。

被爆時の状況

八月六日は八時までに大手町国民学校へ警備招集のため集合することになっていました。

荒神町から八丁堀まで市内電車で行き、新川場町の姉の嫁ぎ先に寄り、少し休んで七時半頃集合場所へ行きました。（被爆後姉の遺体は見つかりませんでした。あの時が最後の別れとなりました。）グランドで休んでいると営利課長から講堂へ集合するよう指示があり、急いで講堂へ向かって歩き出しましたが、左足のゲートルがゆるんで来たので直そうと廊下の隅にしゃがみました。

そのために列が乱れて二列目になったのですが、後で考えるとそのお陰で助かったのだと思います。一列目の人たちは窓側に並んだので全員亡くなられたのです。

講堂に入り椅子に防空頭巾や背囊を置いたちようどその時に写真を写すときのマグネシウムのような

な光が走りました。すると急に真暗になり、その後どのくらい時間が過ぎたのかわかりませんが、ふき飛ばされて気を失っていたらしく気がついたら高い所にいました。

何が何だかわかりませんでした。少しすると足の方が熱くなったので驚いて「助けてくれ！ 助けてくれ！」と叫びました。焼夷弾が落とされて火事になったのだと思いました。誰も助けに来てくれません。

左手が材木にはさまれて動かすことができませんでしたが、一生懸命に右手で材木を押し上げ、やつとのことで自由になりましたが人指し指がつぶれていました。

血も出ず、痛さも感じませんでした。やつと明かりが見えたのでこれで助かると思いました。

外を見ると一番高い所にふきとばされていました。前を見ると市役所の窓から火が出ていました。やつとの思いで下に降り、電車通りに出ると多数の死体ごろがっていました。また「水をくれ！」

「水をくれ！」と倒れている人たちがうめいていました。電車も焼け電線もたれ下がっていました。国泰寺国民学校のグラウンドは食糧増産のため芋畠になっていました。芋の葉は全部なくなっていました。防空壕へ入ろうとして行くと、死んだ人がいっぱいいて入れません。雑魚場町に出て千田町国民学校へ行くと校庭にいた兵隊が「比治山へ行け」と言いました。

御幸橋の西詰の派出所にたくさん怪我人がいて、頭から血を流していた警官が包帯を巻いて人々に羅災証明を書いて渡していました。

私も書いてもらい専売局で少し休んだのですが、一緒に逃げていた上沼の田中さんは「私は動けないからここで寝ている」と言いました。

そこへトラックが来て「歩けない者は乗れ」と言いました。トラックの上には火傷で豚の口のようにふくれ上がった学生が大勢乗っていました。

宇品の検疫所から船で似島へ連れていかれました。似島にはたくさんの羅災者が寝かされていました。

竹の筒で作った容器に入れた梅干とおかゆをもらいましたが、私は食べたらず全部吐きました。卵の黄味のようなものを幾度も吐きました。

夜八時頃、指の治療を兵隊さんがしてくれました。池の側に横になっていましたが、広島は真赤に燃えていました。メガネは飛ばされてなくなつたので、広島へ帰ったら上長岡へ買いに行こうと軽い気持ちでいました。

被爆後の行動と生活

一夜明けると周りの人々が大勢死んでいました。

三日目の朝「広島へ帰っても治療する所はないでエ」と言われましたが、船で宇品へ帰りました。栈橋でぞうりをもらつて履きました。宇品から段原まで一面焼けて見渡せるので驚きました。

歩いて段原の自宅へ帰り、元気な母や妻と会い喜びました。甥も無事で帰つて来ました。家はつぶれかかつており、玄関の四帖間の屋根が飛ばされていました。

府中の山田さん親子が直してくれました。その後何日間か一緒に我が家で暮らしましたので、今でも山田さんはあの時の恩は決して忘れられないと話しています。

甥の引くりヤカーに乗せられて段原国民学校へ指の治療に行きました。兵庫県からお医者が来られていたそうで、つぶれた人指し指は付け根から切り落としました。

血は出ず、傷口から綿のようなものが出ました。

医者は「ここにおったら死ぬから高い所に行った方がよい」と言われたので、山口県の鹿野という所の親類を頼って行くことにしました。しかし汽車の切符がなかなか手に入らず、甥が二日目に駅に並んで徳山まで二枚買うことができました。徳山から奥へ入る自動車の切符は持っていた乾パン五袋を宿のオカミさんに渡してやっと手に入りました。

親類のおばさんは「新ちゃんはこのに来るには来たが、死なにやいいが」と衰弱している私の様子をみて心を痛めていたそうです。

鹿野では大根や京菜の間引菜など青いものをたくさん食べました。井戸がないので池の水でそばを打って食べました。頭を洗った後、タオルで拭いたら髪が全部抜けました。歯ぐきから血が出たので悪い病気でもうつったのかと心配しました。

やっと歩けるようになり、タバコの葉の虫とりなどを手伝いました。鹿野には三ヶ月居て一月に広島へ帰りました。知人の紹介で昭和二年に鉄道に勤め、五五才まで働きました。

ホーム入所前後の状況

母は昭和三年九月一日九九才で死亡しました。

その後、妻と二人暮らしでしたが、五九年に妻が風呂場で転んで入院。六〇年十一月二八日に七九

才で他界しました。

私は自炊をして一人暮らしをしていましたが、耳も遠くなり腰もすっかり曲がってしまいましたので一人暮らしができなくなりました。

保健婦さんのすすめでホーム入所を決心し、平成元年四月五日、甥に連れられて入所しました。お蔭さまで毎日好きな本を読んで安心して過ごさせていただいております。

子どもに助けられ

園田 島（八一才）

被爆地……国泰寺（爆心地より一・〇km）・屋内

当時の急性症状……ガラスの破片で頭・顔を負傷しました。今も頭の中にガラスが残っています。家族の死亡……娘（四才）

被爆前の家族構成と当時の生活

末娘が一〇〇日目に主人が亡くなり、主人の後を継いで書籍文具店を営みながら四人の子どもを育てました。長女小学六年、長男小学二年、三女小学一年、四女四才でした。

五日の日にみかんの缶詰二個の配給があり、四才の子が欲しがりましたが食料だと言って食べさせませんでした。死ぬのだったら食べさすのだったと悔やまれて、今だに仏壇に缶詰を供えています。その晩、音楽会をしようと言って、ひな祭り、こいのぼりの歌を唄ったのが今も目に焼きついてます。その時、この幸せがいつまで続くのだろうと思いました。商売のおかげで何不自由なく暮らすことができました。広島が危ないということで疎開先の緑井に家を借りていました。

被爆時の状況

ピカッと光って、光に驚いて四才の子がお母ちゃんと言って抱きついて来た所、爆弾で家がくずれ落ち、気絶しました。他の子どもたちの声で気がつきましたが、四才の娘はくずれた中で圧死していました。お父さん助けてと言うと、亡くなった主人の声がして何度かの声で起き上がりました。家の中で遊んでいた長男がくずれた屋根を突き破って出てきましたが、肩に怪我をしていました。今も大きな傷跡が残っています。子どもに助けられ、明治橋を通り、江波に逃げました。陸軍病院があり、他の人たちもほとんどん病院の中へ入って来ました。その人たちの姿は顔が真黒になり、服は焼けちぎれ、皮ふは垂れ下がり、半ば裸の状態で石の上にごりまさに地獄でした。

一晚そこで明かしました。その日は何も食べませんでした。

被爆後の行動と生活

七日、外に出てもと来た道を家のあった所まで帰るとあたり一面焼け野原で、家は焼けて灰が一五

センチくらい積もっていました。まだその灰は熱く、子どもの骨は拾うことができませんでした。市役所の方がカンパンを人数分くれました。明治橋の所に兵隊がおり船に乘せてくれ金輪島へ行きました。兵舎に一週間世話になりました。そこでも傷ついた人がどんどん運ばれて来ました。勤労奉仕に出ていた学生が多くなりました。みんな水をくれと言うので水をあげると、死ぬからと言ってやかんを取り上げられました。

翌朝その人たちが死んでおり、穴を掘って投げこみ、油をかけて焼いていました。地獄絵を見る思いでした。

一週間後、また家のあった所に帰り、四才の子の骨を拾うことができました。トラックに乗せてもらい、緑井の疎開先まで行きました。昭和二〇年一〇月、宮崎県の兄が来ないかと言ってくれたので、荷物を馬車で己斐まで運んでもらいましたが、マッカーサーが荷物は西の方面は輸送停止にしたと言い、人間しか乗せてもらえないので知り合いの家にあずけ、身一つで兄の家に行きました。

ホーム入所前後の状況

昭和二五年に広島に出てきました。十日市の妹の家へ行きました。長女が卒業する時だったので、たかの橋の林病院へ勤め、私は伊予銀行の養母、生命保険の外交、新聞配達、集金等して子どもを育てました。

子どももそれぞれ家庭を持ち暮らしているので、自分から進んでホームに入所しました。

早く馴れ、みんなと同じようにして楽しく過ごすよう心がけています。ここに入れてもらって安心

です。

一面火の海

原 田 ヤチヨ（九三才）

被 爆 地……舟入（爆心地より一・〇km）・屋内

当時の急性症状……なし

家族の死亡……妹夫婦・甥・姪・親類の川原喜平

被爆前の家族構成と当時の生活

大正五年、私が一九才の時、主人と結婚しましたが、子どもは出来ませんでした。そして私の母親が病弱で妹の養育も思うようにならず早く亡くなり、父も他界しましたので、妹を養女にして育て、妹に婿養子を取り、子どもも三人生まれました。

当時、主人と私は大野町にある別荘に住んでおりましたが、紙屋町（現在ダイイチ）に妹夫婦と妹の子ども三人、親類の者が住んでいて、八人家族でした。夫が四九才、私四八才、妹夫婦不明、妹の子ども長男八才、次男六才、長女は生まれたばかりの赤ん坊でした。

主人と妹婿は紙屋町の自宅で原田モータースという自動車部品の販売と修理等を行なう商いをしておりました。

被爆時の状況

当時、主人と私は大野町にりましたが、その時たまたま知人の見舞いに行くため、前日から紙屋町の家に泊まっていました。早朝私は家を出て舟入の病院へ行き、着いたとたん、ドーンと大きな音がして一面火の海となり、どうしたのかわけもわからず、見舞った人と二人でどこをどう逃げ、橋を渡ったのか覚えておりませんが無我夢中で逃げました。幸い私は怪我はしてありませんでした。

広島は全壊となり、あちこちに死んだ人が転がって、生きている人も大火傷で服も背中から袖口までも破れ哀れな姿となり、見るのも気の毒で、生き地獄のようでした。

妹たちの安否が気になり、悲惨な光景の中をお寺



や学校をずいぶん探して歩き回りましたが、消息はつかめませんでした。

身内のことも気になっておりましたが、大野町に家があるのだからそちらの方向に行きさえすれば、と必死に歩き、お金を出すからと一生懸命頼みこみ、何に乗ったか、もしかしたらトラックかなと思います、やっとの思いで夜までには大野町に帰ってこられました。

あの日主人は岩国の方に徴用され、原爆にあわず死なずにすんだのです。甥（長男）は袋町小学校に通っていて学童疎開で高田郡のお寺に疎開しており助かりました。

紙屋町の家は、爆心地より一・〇キロ。一番ひどい場所で身内を五人亡くしました。

被爆後の行動と生活

大野町に帰ってからも妹たちはどこにいるのか、戻ってこないのかで何日か待っていました、帰ってこないのか、私一人が広島に出て来て、またお寺や学校をずっと探して歩き回りました。

探して歩き回っていた時出会う人々の哀れなことといったら、焼けて皮がぶら下がって血だらけになり顔が腫れて「水がほしい、水がほしい」と言っているがどうすることもできず、また兵隊さんが仰向けになって片一方の足が焼けて可哀相で哀れなものでした。目の前で死ぬ人もいて、お寺には棺桶が並べられて、死ぬとすぐ棺桶に入れられておりました。いくら探し歩いても妹たちは見つかりませんので大野町に帰りました。その内に主人が岩国から帰ってきました。

私は広島から帰り身体の具合が悪く頭がフラフラし目まいがするようになり困っておりましたが、ちやうど近所に子どもが生まれて疎開をしていた看護婦さんが注射をたくさん持っていて、何本か打

ってくれたので身体の具合が良くなってきたのです。何の注射だかわかりません。しばらくしてまた広島に出て来て紙屋町の家に行ってみました。家がペチャンコで瓦しか残ってなく、私はシヨベルを持って来て、玄関から奥の深い家でありましたが住み慣れた家なのでよくわかり、私はひとりではぐりはぐりして、ずっと奥の方をはぐっていったら台所で妹夫婦が死んでいて骨だけになっておりました。子どもたちはわかりませんでした。壺を持って行き骨を全部拾い集め泣きながら大野に帰りました。その後甥を疎開先より連れ帰り養子にして育てました。主人はいすず自動車に勤めていましたが、昭和二六年九月一八日五五才で亡くなりました。

大野町には畑や山もあり、果物もたくさん出来、生活できました。

被爆後の行動と生活

唯一人生に残りました甥としばらくそこで生活しておりましたが、甥も学校を卒業し就職のため家を出ましたのでひとり暮らしとなり、私は百姓もできないため大野の家を売り吉島に家を建て住んでいました。

吉島の家は湿気が多く困り、以前皆実町の土地を買っていたので、その土地を売り家も売って基町に家を建て一部を人に貸して生活しておりました。

ホーム入所前後の状況

基町の家が市の区画整理となり立ち退き、基町の市営住宅に入居となりました。しばらく一人暮らしを続けておりましたが、高齢となり生活が困難なため、大阪にいる甥と一緒に生活しようと言ってくれて甥夫婦と孫三人と昭和六三年六月から同居いたしました。

身体的状況として、白内障で市民病院へ、浸出性中耳炎で武内耳鼻科へと通院しておりました。

一年弱同居しておりましたが、私事と甥の家庭の事情により同居が難しくなり、広島の知人宅に身を寄せ、大阪と広島の間を行き来しておりましたが、やはり同居は無理となり自分で役所に相談に行きホーム入所を希望して、平成元年四月一四日入所となりました。

現在は高血圧症、動脈硬化症、心臓病、胃腸病があり、水野内科医院で受診中です。元気な時は神田山荘に行き一週間くらいは外泊して帰り、気分をすっきりさせ気分転換をはかっています。若い時は嫌いであった踊りを六〇才くらいから習い始め、今では踊りが楽しくホームの行事の時には舞台の上で踊ることもでき、皆様に喜んでもらって本当にうれしく思います。

外出の折に紙屋町のダイイチの前を通過するたびにあの時のことが思い出されて涙があふれ出て情けなくなり、また激しい怒りで原爆の恐ろしさを忘れることはできません。

忘れ得ぬ水の味

松田 吾郎（八四才）

被爆地……天満町（爆心地より一・二km）・屋外

当時の急性症状……足の怪我

家族の死亡……なし

被爆前の家族構成と当時の生活

私（四〇才）は妻と二人で衣料品の小売業を営んでおりました。戦争がはげしくなりましたので私も徴用の命を受け、日本製鋼へ仕事に行っておりました。

集めた鉄屑を真鍮とかアルミとか等に種類分けをする作業を毎日毎日しておりました。

当時は招集令状により兵役に召されたり、徴用によりお国のためにつくしたりしておりました。

養子、誠は、当時小学校五年生でした。戦争がはげしくなりましたので、佐伯郡佐伯町津田の親戚へ疎開させておりました。

私の兄弟は七人でしたが、私以外は皆、田舎で生活しておりました。

被爆時の状況

八月六日、その日は月曜日でした。日本製鋼の私たちの仕事は月曜日が休日なので家で休んでおり、またところ、八時過ぎ、ピカーと光が走り、ダーンと焼夷弾が落ちたと思うような大きな衝撃があり、アツと言う間もなく家がくずれ落ち下敷になりました。足に木や柱がのしかかりましたが、木や柱が小さかったのと、すき間があつたので、どうにか自力で外へ出ることができました。妻もさいわい大した怪我をしておらず二人で兄のいる佐伯郡佐伯町津田へ帰ることにして、福島方面へ逃げました。周囲の家は皆つぶれていました。「助けて下さい、助けて下さい」と言う声が方々から聞こえてきましたが自分のことが精一杯で人を助けるどころではありませんでした。

己斐まで歩いたら、水が欲しくて動けませんでした。ある家の奥さんに水を頂き飲みました。水があんなにおいしく頂いたのは後にも先にもありません。その後、己斐で妻とはぐれてしまいました。一人で逃げ歩いているうち、シャツがボロボロなのに気づきました。

古江で服をもらって着替えました。

草津で昼御飯を頂きました。

五日市、楽々園の所まで歩いた時は、夕方五時頃でした。

廿日市の宮内村まで行った時、知人の河野運送の人に会いました。その人の車に乗せて頂き、津田へ帰りました。

妻は足に怪我をして、あくる日津田へ着きました。自分では歩いて来たのか、這って来たのかかわか

らないと言っていました。

被爆後の行動と生活

八月一〇日、広島市天満町に帰って見ました。聞いた通り市内は焼野原になっていました。

隣家の吉田さんと大下さんの主人が二人ともニュームの釜を頭にかぶり死亡されたと聞きました。つぶれた家の下敷になり体に火が回って来て、苦しみのあまり釜をかぶられたのだらうと隣家の生き残った人たちと話しました。

さぞ、生きながらの焼死はお苦しみだったらうと思います。そして御冥福をお祈りしました。みんなみんな悲惨な目に会いました。水が欲しい、水が欲しいと叫び、水を飲んでコロッと死亡した人、また水を求めて川へ入り、川が死体で白くなったと聞きました。

私の住んでいた家はペチャンコになって焼けておりました。土壁の倉の鉄の柱が四本残っていました。焼けあとが元通りになるのは一年はかかるだらうと話しました。

八月一五日終戦以後、米は配給で一日七勺でした。その他の食糧も不足で困難を極めました。いつまでも兄の家にやかいになっていることもできないので、津田（佐伯町）に家を建てました。

私も妻も足の怪我がなかなか治りません。薬もない上に、食べる物も不足していましたのでずいぶん苦しい生活でした。牛を殺して隣近所みんなに分けて食べたこともありましたが。

田舎の生活で忘れられないのが、ことある毎に、非農家、非農家と言われたことです。田舎の生活はやはり自分の土地で作物を作ることが一番良いことだと痛感いたしておりました。

お金があつても米や麦が買えないのです。何もかも物々交換なので、羽織が米となり、着物が麦や野菜と交換できるのです。特に食糧不足がひどくて草も食べました。りょうぼうという木の葉も、ゆがいて和えて食べました。そのような生活状態も昭和二五、六年頃から少しずつ緩和してきました。苦勞しながら、誠は広島市内の中学へあげていました。

いつまでも田舎にいてもどうしようもないので昭和二七年、市内江波町に帰り、家を建てました。それから三〇年くらい、衣料品の商売をしました。カスリのもんぺ（ズボンのようなもの）をよく縫いました。私の縫ったもんぺは当時はき良いと評判でした。

いつ頃からか人にすすめられまして、三菱へ一三年間勤めました。おかげさまで今では厚生年金が入り、ありがたいと思っております。

ホーム入所前後の状況

働きざかりに被爆しましたので、みな苦勞しました。私は、その時怪我をした足がなおりきらず、杖を使用し歩行困難で苦勞しております。でもあの時死んだことを思えば今は幸せです。

現在は、原爆養護ホームでお世話になっていますが、何も言うことはないほど幸せです。今の平和な時代を守るためにも、私はホームに來所される生徒さん、学生さんに一生けんめい被爆体験を語り聞いてもらっています。私の話す体験談が少しでも平和に役立つならと、頭痛時は薬を飲んでおしたり、病院へ注射に行く時間をずらして学生さんの來所に合わせて、なるべく話をさせてもらっています。

高血圧、頭痛に苦しむ毎日ですが、私なりに精いっぱい生きています。

権現様の滝の水

佐伯　クニ（八八才）

被　爆　地……上柳町（爆心地より一・二km）・屋内
当時の急性症状……下痢・頭部打撲・脱毛・ガラスで負傷
家族の死亡……なし

被爆前の家族構成と当時の生活

私は二三才で結婚しましたが、子どもに恵まれず三三才の時、夫と死別しました。妹宅は上柳町で印刷屋をしていました。妹夫婦と子ども四人と使用人二人の八人家族でしたから、一人身の私が炊事の手伝いをしておりました。私は四三才でした。

戦争が激しくなると印刷屋は平和産業だから軍需工場へ働きに行くようにといわれ、義弟は鉄工所へ働きに出ておりました。ところが鉄工所で右足にクレーンが落ち、怪我をして入院していましたが五日に退院して来たばかりでした。

被爆時の状況

当時の食料事情はわずかな配給だけで、幼い甥たちがひもじい思いをするので、妹のかわりに私が農家へイモや野菜の買出しに行っておりました。

八月六日も朝食後、今日はどこへ買出しに行ったらよいかと思案しながら玄関に立っていました。

部屋には妹夫婦と小学三年と三才の甥がおり、義弟は足の怪我の手当をしようと包帯をほどきかけ、三才の甥が父親の足をのぞき込んでいました。

ちょうどその時ピカッと光り、家が突然くずれ、梁の下敷になり、頭から血がふき出しました。必死で材木をとりのぞき、歩けない義弟を背負いやつとの思いで外へ出ることができました。妹は三才の甥を背負い、小学生の甥の手をひいて私の後に続きました。夢中で東練兵場へ逃げました。

“水を下さい！ 水を下さい！”と兵隊さんや学生さんがうめいて大勢倒れていました。私はどこで拾ったのかわかりませんが、持っていたハンカチに権現様の滝の水をすくい学生さんたちの口に少しずつたらしあげました。“もつと下さい、もつと下さい”と言われましたが、私も血だらけでへとへとになっていたのもう一度滝まで行ってくる気力もなく、地面にへたへたとすわりこんでしまいました。（注・東練兵場には権現様の滝がありました）

三時頃、三原からトラックでオニギリを運んで来ました。周りの人々は立ち上がれないので、私一人トラックの所へ行き、両腕を揃えてその上にオニギリを並べてもらい皆に配りました。皆おいしそうに食べました。その晩は東練兵場で野宿しました。

被爆後の行動と生活

翌朝、役所の人らしい男性が、汽車賃は無料だから親類のある人は田舎へ行つて下さいと廻つてこられました。

妹たちと相談して、三次の実家に帰ることにしました。

三次には兄夫婦がおりましたが、兄が入隊して兄嫁だけおりました。二階を貸してもらい生活しました。私は髪が全部抜けてしまったので、布で頭を巻き紐でしばっておきました。

傷口にシラミがわいてガサゴソとうるさいくらい聞こえますし、痛痒く本当に苦しい思いをしました。

疎開していたので農家へ着物を持って行き、米や野菜と物々交換してもらいやつと食いつないで暮らしました。学徒で出ていた姪たちも宇品へ逃げていて怪我もなく、三次へ私たちを探しに来たので一同無事を喜び合いました。

着物を食料にかえる生活も心細く、三次では生活の目処が立たないので、二ヶ月後、宇品の従姉茶山を頼つて広島へ帰りました。茶山の家を借りて生活し、私はまた買出しで似島や尾道、福山まで出かけました。旅費が少ない時は空腹のあまり道端のヨモギ葉を噛みながら、砂ボコリで真つ白くなり遠くまで歩いたものです。

あの頃を思うと今の生活が天国だと思います。

ホーム入所前後の状況

義弟が県外から印刷機械を購入して再び店を開きました。お蔭さまで仕事も順調で生活も落ち着きほつとしました。昭和四五年に義弟の後頭部にガンが出来て七一才で他界しました。甥は会社員だったので印刷機械は売りました。

私は六九才になり甥の世話になることも心苦しく、ホーム入所を決心しました。ホーム建設の新聞記事を読んで、申し込むために宇品から市役所まで一四日通いました。もう電車賃がなくなったので最後の日は手を合わせて拜んで頼んで帰りました。

四月八日午前中に一番に入所した時の喜びは忘れることができません。その時の主任寮母さんが優しい笑顔で迎えてくれて“これは母のために買ったぞうりですが記念に貴方にあげましょう”と下さいました。大切にしまっておきましたが、昨年箱から出して履きました。

天皇・皇后両陛下がお越しになられた時は、代表として皇后さまから花束をいただきました。ホームでは手芸クラブで楽しんでおります。私の作った造花を学校慰問の生徒さんが喜んでくれるので励みがあります。時々妹や甥たちの面会もあり、本当に安心してホームで過ごさせていただいております。

帰らぬ子どもを待って…

安 藤 サツキ（八〇才）

被 爆 地……天満町（爆心地より一・二五km）・屋外

当時の急性症状……吐気・下痢・脱毛

家族の死亡……主人・長男

被爆前の家族構成と当時の生活

田中町にて主人（五一才）、息子（一五才）と私（三六才）の三人家族。主人は府中のキリンビール会社の隣にレンガの工場を経営していました。

息子は市立中学二年生で、私は家事のことをしていました。

被爆時の状況

主人は出勤前で家にいて被爆、息子は勤労奉仕のため小網町方面で被爆と思います。私は三菱に野菜をもらいにいく途中で、天満町のバス停でバスを待っていると「ピカッ」と光り「ドスン」と大きな音と共に周りの家はバタバタと倒れ、私が気がついた時にはトタン塀の下敷になっていました。這

い出て同じ場所にいた女学校一年生の子どもと一緒に二中のプールの所まで逃げて行きましたが、方々から火は燃え上がり、誰かが橋を早く渡って逃げないと橋が燃え落ちると言い、急いで旭橋を渡って高須の友達を頼って行きました。しかし家を探しても分らなかったのも、己斐のお花の先生宅へ行って見ると家は壊れ誰もおられませんでした。

女学生の家が三滝ということで三滝まで送り、道路は通れる状態ではなかったので線路をつたって会社に行こうと思いました。途中は焼けただれた人や座ったまま死んだ人、また川の中は水を求める人でいっぱいでした。夢中で会社までたどり着くと主人は先に来て待っていました。

以前より何かあった場合は三人が工場で落ち合うことに決めていました。子どもが来るのを待ちながら屋外で夜を明かしました。市内は火の海でした。

被爆後の行動と生活

七日は主人と二人で学生が収容されている所ばかりを探して歩きましたが見つかりませんでした。八日以後は、主人は外傷はなかったのですが体の具合が悪くなり探しに行くことができず、焼けただれた死体がころがり、まるで地獄のような中を私は一人で子どもを毎日探し歩きました。八月一日に草津小学校でようやく見つけることができました。この日は息子の誕生日でした。

息子は水泳の先生と友達五人で逃げて行っただけですが八日に死んだと聞かされ、誰が掛けて下さったのか、顔には白い布が掛けてありました。

グランド一ぱいに死体が収容されていて、顔は分かりませんでしたが焼け残ったズボンや体格で息

子と分かりました。探す間は何も食べられず水だけ飲んで吐く状態が続きましたが、見つかったからようやく食べられるようになりました。私の髪の毛は全部抜けてしまいました。主人は体調が悪いため注射を打ってもらうと、そのあとは色が変わり腐ったような状態になり、八月三〇日からは高い熱が続き九月三〇日に亡くなりました。

終戦一年後、田中町の自宅の隣にある禅宗寺の住職安藤英巖と再婚しました。当時婚家は姑、子ども三人（一男二女）の五人家族でした。主人は昭和四〇年に胃癌で亡くなりました。現在お寺は長男が継いでいます。

ホーム入所前後の状況

主人との間には子どもはありません。兄弟はみんな死亡しており、主人が亡くなってから夫の長女安藤弘子は一緒に暮らそうと言ってくれましたが、弘子の主人側の両親がいるのでできず、その後喜生園に入所しました。昭和六一年二月、医者に行く途中交通事故にて右大腿骨折し、五日市の松田病院に入院しました。入院が三ヶ月過ぎたので喜生園を退所となりました。

昭和六一年五月一四日にはまた歩行器使用中に横転し、右膝骨折しました。昭和六二年一月九日、原爆病院に転院し、約三年前よりある糖尿病の治療や骨折後のリハビリをしていました。

昭和六二年二月二八日、原爆養護ホームに入所となり、杖・歩行器を使用し毎日自分でインシュリンを打ちながらの生活ですが、安心して暮らすことが出来、喜んでいます。

爆風に驚いて

井上正子（八三才）

被爆地……西白島町（爆心地より一・三km）・屋内

当時の急性症状……なし

家族の死亡……次女

被爆前の家族構成と当時の生活

私は倉敷で生まれ育ちました。

従兄の井上亮が妻と死別して幼い息子を育てるのに苦勞をしていると両親からすすめられて後妻として広島へ嫁いで来ました。一男二女に恵まれましたが専売局に勤めていた夫が出征し昭和一三年四月に北支で戦死しました。私が三二才の時でした。

昭和二〇年頃は物資不足と配給制度のため燃料店が集まって薪炭組合を作っていました。

長男は結核で死亡しましたので、私と子ども三人との四人家族でした。私は三八才で長寿園の薪炭組合に勤めておりました。長女一七才、次女一五才、次男一二才でした。

次男は六年生で可部の亀山に学童疎開をしていました。長女は向洋へ学徒動員で行く予定でしたが、

具合が悪く家で寝ていました。次女は袋町の中電話局へ学徒で勤務していました。

被爆時の状況

薪炭組合の事務所の中で女性ばかり五、六人の従業員と雑談していました。ものすごい爆風で建物が倒れかかったので、何事が起きたのかと皆で戸外へ飛び出しました。幸い誰も怪我をしなかったもので、それぞれ自宅にいる家族が心配になり帰宅しました。自宅は全焼し、その日は家にいた長女栄子は顔にガラスがつきささり血まみれになっていました。驚いて救護所へ連れて行き応急手当をしてもらいました。近所の姪が白島小学校一年生でしたが、帰ってこないと聞いたので探しに行くと校庭に倒れていました。おんぶして帰りました。

夕方次女が帰ってきましたが、どこも外傷はなくほっとしました。その晩は堤に野宿しました。

被爆後の行動と生活

学童疎開先から次男が翌日帰って来ました。

焼跡にバラックを建て暮らしました。次女は、身体がだるいだと横になってばかりいましたが、髪が抜け歯ぐきから出血し苦しんで八月二十九日に死亡しました。

深い悲しみに打ちのめされましたが、戦後の生活苦を乗り切るため二重焼屋をしたり金魚売りをしたり必死に働きました。

昭和二四年に家を建て倉敷から実母を引きとり、氷、燃料、タバコ屋をはじめました。リヤカーで配達して廻りました。

ホーム入所前後の状況

商売も安定し店も広げることができました。

長女も嫁ぎ、次男も結婚して店をひきついでくれました。次男夫婦と孫たちと同居し、私はタバコ屋の店番をしていましたが、つり銭を間違うようになり、だんだん肩身の狭い思いで生活するようになりました。

次男が病弱で入退院を繰り返すようになりました。嫁が商売を一手に引き受けて忙しかったためホーム入所をすすめられ、平成元年一月三一日に入所しました。

次男夫婦や長女の面会を楽しみに暮らしております。

夫・娘を失って

塚 本 カズミ（七九才）

被 爆 地……中広一丁目（爆心地より一・四km）・屋外

当時の急性症状……足に少し怪我
家族の死亡……夫・娘

被爆前の家族構成と当時の生活

夫、娘（一五才）、息子（九才）。

広島が危ないということで息子は縁故疎開で安佐郡安村の実家に預けていました。娘は本川小学校前の電話設備会社に勤めておりました。夫は自営業。

被爆時の状況

自宅前の道路で被爆しました。

隣は二階建が三軒あったので、その陰になったせいか家がくずれて材木で足に少し怪我をしたくらいでした。夫はその日の朝早く所用で出かけていました。娘は六日の朝も会社へ行き被爆しました。私はその日、山手・己斐を通り安村の実家へ帰りました。途中やけどをした人、怪我をした人たちとぞろぞろ歩きました。その晩、夫も娘も被爆死したのか帰りませんでした。

被爆後の行動と生活

二日ぐらい実家におり、夫、娘が心配で探しに市内に歩いて入りました。焼け野原の中を娘の会社のあった本川小学校の所まで行きました。焼けた木などがたくさんあり、探すのが大変でした。電車

通り、市役所の方まで探しましたが見つかりませんでした。暗くなるのでまた歩いて実家まで帰りました。主人と娘は今だに行方不明です。

それからは九才の男の子と農業を手伝いながら暮らしました。八年ぐらい実家におりましたが、元の中広の所へ行き小屋を建ててもらい、近所に工場があつたのでそこへ勤めながら生計をたてていました。一〇年ぐらい勤め、それからは家政婦として働きました。

ホーム入所前後の状況

ホーム入所前の五年間ぐらいは肝臓が悪くなり入退院を繰り返し、先行き不安だし子供も独立しましたのでお願いしてホームに入所させてもらいました。

今はおかげさまで体調の不安ぐらいで何の心配もなく、気がめいったりするとショッピングしたり妹の家に行ったりして気晴らしをして過ごしております。職員の皆さんを始め、皆に良くしてもらって毎日感謝しております。

あの飛行機が原爆を

橋倉 ぶすぎ（八二才）

被爆地……鶴見町（爆心地より一・五km）・屋外

当時の急性症状……なし

家族の死亡……なし

被爆前の家族構成と当時の生活

曙町で夫と長男、長女と私の四人家族でした。

当時

主人（五〇才）はビル会社に勤めていました。

私（三七才）は家事。

長男（一八才）は日通運輸に勤めていました。

長女（九才）は小学三年生でした。

被爆時の状況

隣組の人（二二人）で勤労奉仕として昭和町へ家を倒しに行っていました。

八時一五分、まだ仕事にかかっていない時、「あそこに飛行機が来よるけど一機じゃけんええよ」と兵隊さんが言い、「仕事をして貰わんにゃあ」と言われました。

その時ピカッと光りました。私は木を積んでいた陰に隠れました。他の人は頭をあげて光を見たので顔の皮がつるつとむけていました。私は材木の陰に隠れていたためか、特に変わったことはありませんでした。

子どもを家（曙町）にしているので、気にかかり走って帰ると、天井が浮きあがり屋根が穴だらけになっていました。鏡台、たんすは倒れていました。子どもは近所に預けていたのでどうもありませんでした。

主人は白島の友人の家へ植木を貰いに行っていました。夕方ようやく帰って来て紙屋町の方から歩いて来たと言いました。

「白島の方は家は倒れていなかったが、紙屋町の方は人がたくさん死んでいた」と話していました。

被爆後の行動と生活

主人は被爆後足も悪いと言い、頭の髪は一ヶ月半くらいで全部抜けてしまい、足腰が立たなくなり、寝たきりになりました。

曙町の川上医院にかかっている、これは原爆症だと先生に言われました。主人は苦しみやせ細っていました。

当時は仕事をしようにも仕事はなく、右手も不自由なため、親子四人の生活の糧に明治橋のたもとにあった矢対寄場へ早朝三時半頃から出かけて行きましたが、人数に制限があり、いつもは仕事がないので、向原で米を四斗仕入れ闇売りをしていました。

主人は昭和二三年一二月死亡。主人が勤めていたビル会社より九万円貰いましたが底をついてしまいました。

息子は広島駅の日通で原爆にあっていましたが、昭和二六年九月、松の木に登っていて枝が折れて死亡。

三重県の出身ですので親戚もなく、本当に苦勞をしました。日本電建の左官の手伝いをしていましたが、昭和四五年から七一才まで駅ビルの清掃をして働き続けていました。

ホーム入所前後の状況

駅ビルの掃除中転倒して入院治療し、右上肢も悪化し荷物が持たれなくなり、七一才で掃除婦をやめ、以後家事に専念していました。

娘夫婦が海田町に住んでおり、いろいろと心配してくれ同居するようにすすめてくれましたが、婿の兄嫁が同居しており、迷惑はかけたくありません。

一人暮らしの不安があり、元気なうちにホームへ入りたいと希望し、入所しました。

掃除等、体を動かしていると、他のことも考えず過ごせるので楽な気持ちで生活しています。
自分でできることは頑張つてやっていきたいと思います。

生きながら地獄のようでした

中 野 ミヤノ（九二才）

被 爆 地……鶴見町（爆心地より一・五km）・屋外

当時の急性症状……左腕、手、背の火傷

家族の死亡……なし

被爆前の家族構成と当時の生活

本人 中野ミヤノ 当時四七才

夫 中野喜郎九 江波三菱に勤務・五〇才

次男 中野 善生 被服廠に勤務

長女 中野 弥生 九才

松川町で夫婦と子どもの四人暮らしでした。

被爆時の状況

原爆の日は主人と長女は家にいました。私は建物疎開に行つて下さいと頼まれ、近所の人と三人で鶴見町へ行つて作業をしていました。

作業をしていますと、突然ピカッと光つて大きな音がしました。気がついてみますと上半身は裸で左手の皮が垂れ下がっていました。下半身は伊達巻をしていましたので、モンペが破れただけで助かりました。頭は帽子をかぶり、その上に手拭いをしていたので助かりました。頭髮は抜けませんでした。一緒に行った女の人はその場で死んでいました。男の人は家に帰り、数日して死なれました。

家に帰つてみると、二階建てでしたがつぶれていました。主人と娘は家にいましたが、タンスの陰になり助かりました。後で娘が、お母ちゃんは顔が真黒で唇は腫れているし見られなんだ、と言っていました。

被爆後の行動と生活

次男が被服廠に勤めていましたので、九月中旬頃まで家族四人で被服廠に収容されました。土間に敷を敷いただけの所で、火傷や怪我人が一杯でした。今日は何人死んだ、というような毎日でした。生きながらの地獄でした。

私は下痢と吐気と体の痛みで何も食べられませんでした。火傷の傷口にはウジがいっぱいいました。

九月中頃まで被服廠で過ごし、皆実町に家を借りて移りました。主人と次男が私を大八車に乗せて運んでくれました。主人は江波三菱に勤めていましたが、ほとんど家にいて私を看病してくれました。背中や腕にケロイドは残りましたが、十一月末にやっと起きて茶碗が持てるようになり、それから体は良くなってきました。今でも時々火傷のあとが痛みます。

ホーム入所前後の状況

昭和四二年一月一六日、夫は七三才で死亡しました。私は七〇才で後家になりました。夫の死後、夫と共に二才の時より育てた孫の福子と戸坂の市営アパートに移り、市営球場の掃除の仕事を七〇才より始め、七六才まで続けました。

福子が一八才で結婚したあと一人暮らしをしていましたが、腸閉塞で六月一八日太田川病院へ入院いたしました。高齢のため一人暮らしに不安を感じ、ホームに入所を希望しました。

最近はずまらんようになり、ご迷惑をかけてすみません。孫の面会がたまにあります。それが楽しみです。

次々と発病し

脇坂義博（六九才）

被爆地……西観音西町（爆心地より一・五km）・屋外

当時の急性症状……上半身火傷・脊椎圧迫骨折・下痢・脱毛・歯ぐきから出血・嘔吐・血便
家族の死亡……父・母

被爆前の家族構成と当時の生活

両親と妻との四人家族でした。

西消防署の己斐出張所で消防士として勤務していました。体格が良く力持ちなので、すもう大会では誰にも負けることがない二四才の若者でした。

被爆時の状況

八月五日は当直でしたから、六日は当直明けで午前八時に家に帰る途中でした。

第二中学校西門前の堤で熱線をあび、一瞬のうちに頭部、首、顔面、胸部、両腕、腹部と上半身ひどい火傷になりました。

爆風に二転三転しながら地面にたたきつけられました。皮膚が垂れさがり、脊椎圧迫骨折したので立っているのもやっとでした。血と泥でベトベトになりました。ちょうど消防車が旭橋を渡って来たので助けを求めました。同僚は変わりはてた私の姿をみて、はじめは誰かわからなかったようでした。『どうしても消火活動に従事しなければならない』と言いましたが、大火傷をしている私の様子に驚き、同僚は己斐出張所へ帰って治療してもらうように言い残し走り去りました。

あとで聞いたところでは中野化成工場へ出勤途中だったそうです。

西観音町の自宅へ戻ると、家が全壊し、瓦礫の下から下半身が焼けて母が死んでいました。父は下敷になったのかとうとう行方がわかりませんでした。どこを通ってたどり着いたか思い出せませんが、己斐出張所にたどり着いて倒れてしまいました。多数の怪我人がうめいていました。その夜、サイドカーに乗せられて廿日町の義妹宅へ連れて行かれました。

妻は己斐の会社に事務員として勤めており、無傷でした。

被爆後の行動と生活

義妹宅で約半年間近く医師の往診を受けて寝ていました。

顔面の火傷がひどく口を開けることができないので、ストローでわずかばかりのスープを飲む程度でした。日に日に衰弱していきました。

高熱、菌ぐきからの出血、血便、下痢などの症状が半年くらい続きましたし、髪の毛が全部抜けました。

その後、妻の実家のある呉で養生し、少しずつ元気になりました。

昭和二二年に長男が生まれ、続いて次男、三男も生まれて、私も元気になり酒の販売業に励みました。

ところが昭和三五年―三九年の間に下血、血便が続き、広島大学病院で六回手術を受けました。

妻は昭和四五年に四八才で再生不良性貧血で死亡しました。

私は昭和五二年八月舌腫瘍のため広島大学病院で手術を受け、五四年頃より肝障害で原爆病院へ入院しました。不幸は重なり、五七年に次男が三三才で交通事故で死亡しました。

私はその後、ビラン性潰瘍、胆石症、腹膜炎、慢性肝障害、変形性脊椎症と次々と発病し、入院生活が続きました。

ホーム入所前後の状況

酒販売業を引きついでくれた長男の家族（妻と子ども二人）と同居していましたが、嫁も勤めており、日中一人になるので、留守の間に倒れたら…と不安でホーム入所を希望しました。

五日市の自宅から原爆病院へ通院するのもきつかったので、交通の便のよいホームに入所できたことを喜んでいました。

症状は一進一退で入院・退院と相変わらずの生活ですが、同室に仲よしの友人も出来ましたし、ホームの職員の方々に親切にお世話をおたいただき、安心して毎日を過ごしています。

孫たちが被爆体験を「おじいちゃん、話して聞かせて」と言いますが、あまりに悲惨な体験を思い

出したくないので一度も話しておりません。

広島県済生会病院にて平成二年三月一日、食道静脈瘤よりの出血のため死去されました。

合掌

ちえ子を抱きしめて

沖野 イクヨ（八一才）

被爆地……舟入幸町（爆心地より一・五km）・屋内

当時の急性症状……なし

家族の死亡……養女

被爆前の家族構成と当時の生活

舟入幸町で、舅、姑、夫、ちえ子（養女）、私（三六才）の五人家族でした。舅、姑、ちえ子の三人は近所に家を借り、別居しておりましたが、同居同様の生活でした。

長男正男は軍用船に乗り、南方に行っていました。

昭和二〇年七月二十七日、衣裳など大事なものを預けるため、友人のいる佐伯郡能美町美能へ、主人と共に船で行きました。午後四時頃潮が引き、美能棧橋に停泊していた時、突然二〇機くらいの飛行機が飛んで来ました。夫が大声で中へ入れと言いました。鉄カブトをかぶり、座布団でおおっていました。逃げる間もなく、船上で機銃掃射の弾丸に撃たれ、右腕から脇腹にかけて大怪我をしました。美能から市内まで帰る船中で痛くて痛くてたまりません。私は思わず「お父ちゃん、私を海に落としてちょうだい」と叫びました。

住吉橋へ上がり、土谷病院で受診し応急手当を受けました。

土谷病院の指示にて、翌朝日赤病院で受診しました。先生に右腕をかるくたたかれると、カチンカチンと音がするのです。そこに弾丸が入ったままになっていたので、手術して弾丸を出してもらいました。激痛の上、高熱が続き、右乳部まで腫れあがる状態でした。それから毎日日赤病院に行きましたが、痛くて腕は上へも下へも動きませんでした。

被爆時の状況

八月六日は町内会の勤労奉仕で建物疎開の当番に当たっていましたが、大怪我をして寝ていましたので、隣家の奥さんに替ってもらいました。

家で仰向けに寝ていたところ、ピカーと光が走ったと同時にバシャーと土が目に入り、家がつぶれて私の体の上にのしかかりました。目が痛くて開かない、つぶれた家の下敷になっている体は痛くて動きがとれない、気が付けば大きな梁が私の太もものあたりにのしかかり動きそうにないのです。

痛み、苦しみは増すばかりで、「お父ちゃん助けてー」とくり返し泣きながらあえいでいました。

夫は私を助けようとして手や足を引っぱってくれました。「お父ちゃん、手が痛いよー」「ガマンせー」と叫びあつていましたが、私が気が遠くなりそうになった時です。夫が敷居を肩にかつぎ、テコの応用で梁を持ち上げ助け出してくれました。主人が居なかつたら私は間違いなく焼死していたと今でも思っています。主人は五寸釘を踏み、それを自分で抜いて、私を助けてくれました。

それから土手づたいに江波山へ逃げました。途中の防空壕へ入れてもらえなかつたので、江波小学校へ逃げて行きました。そこで、火傷でボロボロになって泣いていたちえ子に会いました。

神様が会わせて下さったのだと思われ、ちえ子を抱きしめてただただ泣くばかりでした。ちえ子も、ただ「お母ちゃん、お母ちゃん」と叫び続けました。

災害を受けた時は宮島の田舎へ疎開することになっていました。知り合いから乳母車を借り、夫が私とちえ子を乗せ、途中で治療をしながら五日市まで行った時、ちえ子が水が飲みたいと言いました。水が飲みたいと言つても水はない、すると兵隊さんが水筒の水をちえ子に下さいました。ちえ子はおいしいと言いながら飲みました。

それから少し歩いたら、どうしたのか、ちえ子がコロッと死んだのです。目的の家に行くまでに死んでしまったちえ子を抱いて悲しみのあまり泣きじゃくりました。いつまでもそうしてもらえず、畠に穴を掘り、ちえ子と男の子、他に男性三人をガソリンをかけて一緒に焼きました。骨をもらつてしっかりと抱いて帰りました。

舅と姑は、原爆投下すぐ後、一緒に逃げるため家を出たそうですが、姑がサイフを探しに家の中へ

引き返したまま、行方不明になりました。方々探しましたが死体も見つからず、未だ確認できていません。舅は無事でした。

被爆後の行動と生活

夫と私は舟入幸町の家跡にバラックを建てて住みました。幸い船が焼けなかったので、魚をとり、それを売って暮らしておりました。戦後の食糧事情の最悪の時でしたが、新鮮な魚は皆さんに喜ばれ、飛ぶように売れ、物々交換で米もありました。一人息子の正男が帰った時食べさせようと思つて一斗の米をかくしておりました。

九月頃だったと思います。夫と買物に出て帰った時、家に近づくると近所の人たちに「早う帰りんさい」と大声で呼ばれました。心の中で泥棒が入り米を盗られたかと心配しました。それほど米は貴重なものだったのです。

家に近づくとき「アッ、アッ、アッ」、声が出ません。一人息子正男が荷物を背負つて玄関口に立っていました。私は腰が抜け、立ち上がれない状態でした。

消息を絶っていた正男は、軍用船に乗り、南方方面に出入りしていたそうです。南方で船がやられた時は、油の海の中を三、四日泳ぎ、捕虜になつて苦しい収容所生活をしていましたが、終戦になつて帰国したのです。水泳が上手だったので助かつたと言っていました。

ホーム入所前後の状況

夫が昭和三十一年死亡。私も働けるうちは働いていましたが、病弱になり一人暮らしが無理になりましたので、昭和六一年九月一七日、原爆養護ホームに入所しました。

現在は病弱にもかかわらず、自主的な気持ちで毎日を意義あるよう心がけて暮らしています。ありがたい、もったいないという感謝の気持ちを忘れないよう頑張る心構えです。

助けを求める声にどうしようもなく

木口愛子（七九才）

被爆地……平塚町（爆心地より一・五km）・屋内

当時の急性症状……背中、腰の打撲・脱毛

家族の死亡……兄・甥

被爆前の家族構成と当時の生活

母（六〇才）と兄夫婦（年令不明）と甥（九才）と私（三五才）の五人家族でした。

母は平塚町の東遊郭の近くで食堂をやっており、私と兄嫁も手伝っていました。兄は役所に勤務しておりました。甥は当時小学生でしたが、夜尿症があるため疎開ができず、市内の学校に通っていました。

被爆時の状況

母は税金を納めに行くため、家を出て遊郭あたりで被爆。兄は役所の仕事で江波に行く途中で被爆。兄嫁は家の一階にいたので、すぐ飛び出て下敷にならず、比治山に逃げて行き兄に会ったと思います。空襲でバラバラになった時は比治山に集まるよう決めていたからです。

私は家の二階にいて被爆。屋根の「はり」が落ちて下敷になり、何とか這い出て二階から飛び下りました。無理矢理はい出たため体は傷だらけでしたが、逃げるのに夢中で痛みは感じませんでした。まわりの家は全部壊れ、火はだんだんと広がって、火のこない所へ逃げようと思いました。柳橋の方は家屋疎開で家がなかったもので、その方面に逃げました。そこには大勢の人が避難しており、そこで一夜を過ごしました。まわりは火の海となり、焼けた人が川に逃げて行き、川の中は死体で一ぱいでした。家族のことが気がかりでしたが、その場から動くことができませんでした。

被爆後の行動と生活

七日に知り合いの兵隊さんが部下と山口へ行くということで、私も山口の伯母の家に連れて行ってもらったためいっしょに横川駅まで電車の線路をつたって行きました。まわりは死体がゴロゴロとこ

がり、その中には助けを求める人もいましたが、どうすることもできませんでした。その地獄のような様子を今でも忘れることはできません。

伯母の家に行き、母も後から来てお互いに無事だったことを喜びました。兄は八月一二日に死亡したと聞かされ、甥はどこで死んだのか探し出すことができませんでした。八月五日の夜、桃があつたのを甥が欲しがりました。明日あげると言って食べさせなかったのが悔やまれます。桃を見るとあの時のことが思い出されて食べることはできません。

兄嫁は山口県の人で、母は兄嫁と一緒に山口で生活しました。伯母の家で一年余り暮らし、それから三原の友達の家で半年過ごして、その後仲居をして生活していました。被爆で下敷になった時、背中や腰を痛めたのがもとで仕事ができなくなりました。生活保護を受け、五日市の病院に九年間入院していました。

ホーム入所前後の状況

腰痛は治らないまま入院が長いので、どこかのホームに入るよう病院より指示があり、いろいろと探しました。原爆養護ホームがあることを知り、市役所に申し込んで入所することになりました。ホームに入所してやっと落ちつき、安心して暮らすことができました。

入退院をくりかえし

宮 本 二三夫（八〇才）

被 爆 地……宝町（爆心地より一・五km）・屋内

当時の急性症状……右眼にガラスの破片が入り失明・頭部裂傷
家族の死亡……なし

被爆前の家族構成と当時の生活

昭和二〇年四月一日付で、向洋陸軍小倉造兵廠福山出張所より同廠広島出張所に転勤。
安芸郡府中町の鹿籠の日本製鋼社宅を借り、妻・長女と私の三人で生活をしていました。

被爆時の状況

八月六日、袋町日本銀行広島支店へ、所員の給与・出張旅費を受け取りに行くため、早朝府中の自宅を出発しました。かねて、宝町の長男宅の二階部屋を見たいと依頼していたので立ち寄り、玄関の格子戸を開け、入った瞬間ピカッと光ると同時に、爆音と共に爆風で飛ばされ、格子戸のスリガラスの破片が右眼に入り失明。頭部裂傷、左の顔を七センチ切り、四〇数ヶ所ガラスの破片が突き刺さり、

血が吹き出て血まみれになりました。無我夢中で外に飛び出し、比治山橋をみんなでわたりました。破壊された家、壊された瓦と電線が切れ鉄条網のように散っているところをどんどん山の方へ歩きました。現在の大学病院手前に山があり、どの谷かわからないが谷に入り、みんな避難するが、またドカンと一発きたら今度こそ命はないと思い東大橋をわたり大州四丁目まで逃げると、怪我人や火傷している人をトラックに積んでいるところにたどりついたので、私も頼んで乗せてもらい、向洋の青崎小学校のグラウンドに避難をしました。二階建ての影に寝ころんでいたら、呻く者、悲鳴を出す者、血まみれになって動かない者が一五〇人、一六〇人ぐらいいました。内科の医者で看護婦を一人連れ思うような手当もしてもらえず、アルコールで消毒し、ガーゼをあて、その上から包帯を巻いてもらうとまるでインド人がターバンを巻いたようでした。向洋の役所に連絡をしたいと話すと、部下の小池が来て府中の妻に知ら



せてくれたので、夕方妻が来ました。農家の大八車を借り私を積み、府中鹿籠の自宅までつれて帰ってくれました。四畳半だけは直接被害がなかったのでそこで終戦を迎えました。

被爆後の行動と生活

昭和二十一年五月、妻の実家福山市へ転居し、鉄材ブローカー、農機具販売、紙製品販売と転々とするものの、不況のためうまくいかず妻、娘と離別をしました。

広島で自立しようと思いきい単身で帰りましたが、する仕事がなく、駅前で知り合った男が貸本屋を勧めるので、店を借り五十六年続けていましたが、テレビの影響でうまくゆかずやめました。

それから病院勤務、映画館と職業をかえましたが、そのうち十二指腸潰瘍、高血圧のため仕事はできず、入退院を繰り返すことになりました。

ホーム入所前後の状況

心臓、肝臓病をわずらい一〇〇メートル道路の近くの高橋病院へ入院していた時、原爆養護ホームに入所していた髭の老人に話を聞いたので、市役所に行き手続きをしました。ホームへ入所した時は、天国だと思いました。

体は丈夫になるし、老後を平穏に暮らし今日までどうにか健康を維持してきました。そして昭和六〇年十一月一四日惣持不痴子と知り合い、外で暮らそうといってホームを希望退所しました。一年五ヶ月生活を共にするも、惣持が体が弱く私の体の衰え、健康や生活面に不安を抱き、昭和六二年八月

七日再び当ホームへ再入所をしました。一昨年の年忘の時に、新聞記者のインタビューに、こない所はないです。ホームは老人天国ですと答えました。以後大きな故障もなく安心して生活ができる事を感謝しています。

家がぐしゃつとつぶれて

笹原 みやぶ（八八才）

被爆地……鶴見町（爆心地より一・五km）・屋外
当時の急性症状……下痢
家族の死亡……なし

被爆前の家族構成と当時の生活

幼い頃より病弱でした。

一五・六才頃、おもちゃ屋をしている姉を頼り上京。

家事や店の手伝いをしていました。一九才で結婚、しかし六ヶ月で離婚。

当時三川町に部屋を借り一人で住んでいました。中央木材の支店で電話番号のような仕事をしていました。

被爆時の状況

家屋疎開の作業中、写真を撮る時にマグネシウムをたくように、シャーと光がきました。私は家へ飛びこみました。

ぐしゃっと家がつぶれました。その下敷きになり、早くにげないと第二の災難が来るのでどうしようかと思いました。

しばらくすると「火がまわってくるので、家にいる人は早く出なさい」といっていました。「家の下につぶされているんです」といって、助けを求めました。他の人はずんずん行つて私の事はかまつてもらえませんでした。しかたがないので、自分が死んでも名前等がわかるようにと思い、胸に付けていた名札（名前・住所・年齢・血液型）が焼けないようにしました。下敷きになった所が、ガラガラと開ける戸の下（敷居）で、土が柔らかかったので、近くにあった木切れをひろつて一生懸命敷居の下を掘りました。

はつきりわかりませんが昼ごろ、家の下から這い出しました。

暗い場所から明るい場所に出たので、眼が痛くてどうにもなりませんでした。

逃げていくとき、自分は血だけは出ていないが足や腰が痛くて不安でした。まわりの人は血だらけ

でした。

女の人でつるはしが頭につきささり、腰の帯には子どもがぶら下がり、ふらふら歩いていたので早く救護の人に会えると思いました。

三川町の避難場所がどこかわからなかったので、人と連れだって行きました。そこは学校でした。その後、休み休み比治山の兄の家にたどり着きました。その家は比治山の影だったので瓦がずれている程度でした。そこで一夜をあかしました。

被爆後の行動と生活

あくる日、古市（兄嫁の弟宅）へひとまず行き、子どもの世話をしていました。一週間後、他の兄が迎えにきたので広島に戻りました。その時、広島町は焼け野原になっていました。

比治山の長男宅で、一ヶ月間世話になった後被爆後の身体治療にと別府へ行き、お手伝いをしながら二―三年過しました。

一週間くらい下痢が続きました。特に夜間体中が痛みました。広島に戻り、兄から貰ったお金で旅館住まいをしていましたがお金もなくなり、自活せねばと考えました。

偶然知り合った人が芸者置屋の女将で、下働きとして住み込んで働きました。

ホーム入所前後の状況

妹（兵庫三千代の母）が己斐で仕出し屋をしていた頃は、同居し手伝っていました。妹が店をやめ

たため、昭和四八年より喜生園へ入所しました。

昭和五五年一月、土谷病院入院。胃潰瘍の手術をしました。

昭和五五年二月二十七日、草津病院へ肺炎のため入院。

衰弱し、おしめを使用した生活でしたが、回復し退院と同時に原爆養護ホームに入所して、最初は
何の苦勞もなく、三度の食事も頂き、もったいないと思いましたが、今では慣れてしまったので、特
に感じなくなりました。

慣れるということは、こわいものですね。

原爆のショックで

石井 安太郎（九〇才）

被爆地……平塚（爆心地より一・五km）・屋内

当時の急性症状……なし

家族の死亡……妻、行方不明

被爆前の家族構成と当時の生活

本人	石井	安太郎	四五才
妻		千枝子	?
長女		秀子	七才
次女		安子	五才

私は家族四人で平塚町に住み、広島市内や近郊を、鍋釜の修理をするのを、専業として生活していました。度々空襲があるようになってからは町内の防空壕で寝起きし、住んでいる家には御飯を食べる時、帰るくらいでした。

被爆時の状況

原爆の日は、私と娘二人の三人で防空壕の中にいました。それが幸いして怪我もありませんでした。妻は、勤労奉仕の月番にあたっていたので、香川町内会長に連れられて、建物疎開に行きました。どこに行ったかわかりませんでした。町内会長さんも帰られませんでした。

家は三〇分位して火の海になりました。私は焼けている市内を妻を探して歩きました。「水をくれ、水をくれ」と、どこに行っても聞こえてきました。豚の口のような人、内臓の出ている人、橋のたもとは、そのような人が、かたまっていました。

私は、何日も妻を探し歩きましたが、とうとうわかりませんでした。

被爆後の行動と生活

私は、七才と五才の娘を連れて、被服廠の隣の工兵隊の大きな防空壕で、一ヶ月位さまよって暮らしました。その後、被災証明をもらって、能美島に行きました。青年会館の二階で暮らしました。ここで長女が具合が悪くなって、土地の医者 of 診断を受けました。脳をやられているという事で、五日市の脳病院に二年あまり入院しました。良くないので、市の方から紹介されて御調郡御調町の専門の病院に連れて行きました。長女は、今もそこに入院しています。原爆のショックで、精神に異常をもたらしたらしいのです。

能美島には五年か六年住みました。それから、宇品に戻り、再婚しました。トシコと言いました。トシコとは一三年位暮らしました。家も庚午の市営住宅に移りました。

そのうち、体も悪くなり生活も苦しくて、市役所から私たちに良い施設があると教えられ、夫婦で入所を考えました。まず私が先に行つて様子をみようということ、昭和四八年に私だけ入所しました。

昭和五二年頃、妻の体が悪くなり、私はホームを退所して妻の看病をしました。昭和五五年、妻は看病の甲斐もなく死亡しました。

ホーム入所前後の状況

昭和四八年、次女安子は結婚し、現在安佐南区に住んでいます。私に同居を勧めてくれますが、私は娘に頼る気はありません。

体も弱り、高齢になったため、再びホームに入所する決意を致しました。

現在は、長女の秀子の事が気掛かりですが、次女安子が度々訪ねてきてくれます。私は今、一番安らいだ生活ができて、何も言うことはありません。

背骨の痛みがはげしくなり

本田 ツル（九五才）

被 爆 地……東観音一丁目（爆心地より一・七km）・屋内

当時の急性症状……骨推打撲

家族の死亡……なし

被爆前の家族構成と当時の生活

私は一八才の時、写真見合いで遠縁にあたるハワイ在住の本田喜八と結婚しました。ハワイへは船で四〇日かかりました。当時、写真見合でハワイへ嫁いだ人を「よびよせ夫人」といつていました。二男二女に恵まれ家業のクリーニング店も使用人をおいて順調でした。

昭和二年に帰国し、広島でクリーニング店を開くことになりました。紙屋町に店を開くため新しい機械を準備しましたが、開店直前に夫が急死してしまいました。私一人では、できないので人にゆずり、実家の兄の借家で洗い張りなどの仕事をはじめました。一三才の長男を頭に二男三女の子どもをかかえ、朝早くから夜おそくまで、一心に働き続けました。

身体割に大きい手だと人さまは言いますが、よく働いた手だといとおしく思います。昭和二〇年頃は長男はフィリピンへ、次男は北京へ出征していました。長女はアメリカ、次女は軍属の夫と共に北京に行っておりました。私は五〇才で末娘のヒサ子は一八才になり女学校を卒業して通信局へ勤めておりました。

伴の実家では、空襲が激しくなるので早く田舎へ疎開するようにとすすめてくれましたが、ヒサ子一人を残しては心配でしたから二人で頑張って暮らしていました。実家からの援助で食べ物には不自由しませんでした。

被爆時の状況

娘が出動したので、私は台所で朝食の後片付けをしていました。突然すごい爆風で家が倒れ、その下敷きになりました。天窓からやと這い出しました。出てみると、三方が火事になっていたので天満町に出て小河内橋をわたって山手の畠の中に避難しました。

間もなく黒い雨が降って前身がずぶぬれで真っ黒くなりました。着ているものはボロボロになったので裸同然でした。夕方になって祇園を通って伴村の実家へたどり着きました。

被爆後の行動と生活

実家にはすでに弟の家族や甥達が全身火傷で避難していましたので、私も怪我をしていましたが、皆の世話に追われて自分の身体のことをかえりみる余裕なく夢中でした。

娘の安否が気づかわれ、近所の人が通信局にいるらしいと知らせてくれたので九日の朝、歩いて昼頃市内に入りました。

局員収容者氏名の中に娘の名前を見出した時の喜びは忘れることができません。

収容先の通信病院へゆくと娘は左足首にひどい怪我をして歩けない状態でした。通信局の四階部屋で被爆し、ガラスが左足首につきささり動けなくなっていました。上司の方がおんぶして病院へ連れてきてくださったそうです。

救護の兵隊さんが軍の大八車に娘を乗せてくれ、一緒に伴村まで押してつれ帰って下さいました。

実家は病人は多く、娘の足の治療もできないので、分家の弟宅で世話になりました。

娘を乳母車に乗せて一時間以上もかかる所へ治療に通いました。そのため私の身体が弱って倒れてしまいました。一ヶ月位静養して少し元気になり、娘もどうにか歩けるようになりました。弟と大八車をひいて家の焼け跡の整理に一週間位通いました。防空壕に入れておいた瀬戸物など使えるものをほりだしました。

戦後不在地主のためすべての田舎の土地を手放しました。

ホーム入所前後の状況

昭和二二年一月、幸運にも基町の市営住宅の抽選に当たり、伴の実家から娘と一緒にバラックに移りました。長男、次男も無事に復員したので無事を喜び合いました。

長男は仕事で東京へ行ったので、次男夫婦と娘と四人暮らしでした。その後、娘も嫁ぎ、次男夫婦も福山へ勤めの都合で転居しましたので一人暮らしとなりました。

昭和四五年頃より、被爆時打撲した背骨の痛みが激しくなり、歩けなくなりました。貧血もひどくなり、原爆病院に入院し、その後は、入退院の繰り返しでした。

福山の嫁は遠くからすぐ来てくれ、世話をしてくれまし、娘も力になってくれますが、娘も病弱で無理がきかないので退院後ホームに入所を決意しました。

昭和六一年三月二四日、九一才でホームへ入所しました。

大勢のお年寄りとおしゃべりしたり、音楽クラブで歌をうたったりして毎日楽しく過ごさせていた

だいております。

規則正しい生活ですから、体調もよく一〇〇才までは頑張つて生きたいと思っています。

母と妹は一瞬のうちに

升 田 清 美（七〇才）

被 爆 地……千田町（爆心地より一・七km）・屋内

当時の急性症状……発熱・黄疸

家族の死亡……母・妹

被爆前の家族構成と当時の生活

両親と弟二人と、妹二人私の七人家族でしたが、二三才の弟は海軍へ、一七才の妹は疎開し、家には残りの父五〇才、母四七才、妹二一才、弟一九才に当時二五才の私の五人家族で住んでいました。私は軍隊を除隊後、観音町の旭兵器という会社に勤務していました。

妹弟もそれぞれ会社勤めをして、みんな元気で楽しく生活を送っていました。

被爆時の状況

爆弾が自宅に落ちたのかと思うほど、家の崩れる大きな音と強い光がしました。

家族を見ると、母と妹は建物の下敷きになり、絶命していました。助けようにも助けようがありませんでした。母と妹に声をかけ、呼べども呼べども返事は返ってきませんでした。これが戦争だと思つていましたので、感傷にひたっているひまはありませんでした。

私は左顔半分、左腕に火傷を負いましたが、父と弟は奇蹟的にケガ一つしていませんでした。外に出てみるとケガ人ばかりでした。

海田の海軍に行っていた弟に会うため、府中の方に移動しました。その間、皆実町付近までは死体が道路にころがり、多くのケガ人が横たわり助けを求めたり、水を求めうめき声が聞こえる中を、途中物の下敷きになっている人を助けたり、傷を負っている人に肩を貸しながら船越峠を通り海田へぬけましたが、私以外にも多くの人が奥へ移動していました。

海田にたどりついて、弟は救援のため広島に行き、行き違いになってしまい、やっと五時過ぎに連絡がとれました。

そこでやっと海軍の軍医さんに顔と腕の火傷の治療をしてもらい、海田の友人宅で一晩お世話になりました。

被爆後の行動と生活

翌日、呉の弟の下宿先に行きました。そしてその翌日は、まだ燃えている火の中を広島の実家へもどりました。途中遺体がゴロゴロし、救援の人たちが学校の庭、川土手で火葬しているのがあちこちで目に入りました。

自宅にもどり母と妹の遺体をみますと、無残にも体は焼けていましたが頭の部分はまだ残っていましたので、火葬して呉まで弟に持って帰ってもらいました。

私はそれから勤務していた旭兵器が気になり、行ってみると焼けないで残っていました。

父の友人をたより三良坂に行こうと思い、三滝を通り戸坂へ出て芸備線に乗りましたが、列車の中はあみ棚まで人がいっぱいでケガ人と身内を探しに来ている人でいっぱいでした。やっこの思いでデツキにぶらさがり、三良坂に着きました。

三良坂にやつと着いたと思ったら、三八度―三九・五度の高熱と黄疸に悩まされ、四〇日あまり知人宅でお世話になり、ふたたび広島に帰り、会社へ残務整理に行き、その後退職し倉橋に帰りました。田畑八反を耕作し、父、妹、弟、私の四人の生計をたてていました。

かや、毛布の救援物資も届き、あまり不自由はなく、当時としては恵まれた生活を送っていました。

ホーム入所前後の状況

昭和二三年に結婚し、一男二女の三人の子どもをもうけ五人家族で生活し、当時は木造建築の請負

をしていました。昭和四八年に事情があり離婚し、その後は一人暮らしをしていましたが、平成元年一月に風邪がもとで肺炎になり、福島病院へ救急車で入院、一ヶ月くらい入院しました。体が弱くなり、一人暮らしに自信がなくなり、福島生協病院の相談員の方に入所を勧められ、決心し入所することになりました。

平和のためにつくしたい

藤 堂 忠 夫（七七才）

被 爆 地……観音本町（爆心地より一・七km）・屋外

当時の急性症状……頭部打撲・左半身外傷打撲・耳管狭窄・下痢・発熱・嘔吐

家族の死亡……なし

被爆前の家族構成と当時の生活

昭和八年、陸軍運輸部の經濟部に勤務し、翌年結婚しました。昭和一〇年長女、一三年に長男が生まれ、充実した家庭を築いていました。両親は日支事変に入ってから上海で被服関係の下請け会社を経営することになり、結婚していた妹をつれて旅立ちました。その年に次女が生まれました。

昭和一八年に陸軍運輸部を退職して、船舶食糧関係の宇品、門司の責任者として勤務することになりました。

昭和一九年に長女が学童疎開をしなければならぬので、生まれたばかりの幼い三女のためにも、家族ぐるみで大竹のおじの家へ疎開することになりました。当時は国民国家総動員が発令され、連日、強制建物疎開のため町内会や職場、学徒による勤労奉仕が続けられていました。

私が三三才、妻二九才、長女一〇才、長男七才、次女三才、三女一才の六人家族でした。家族が疎開したので自宅に私一人が残り、部下に開放しておりました。

被爆時の状況

八月六日は晴天で、朝から暑い日でした。前夜の空襲警報が解除されたので、急いで朝食をすませ、国民服にゲートル、軍帽、軍靴に身支度を整え、自宅から市内電車の的場停留所へ行き、己斐行きの市内電車に乗って天満町で下車し、観音本町の双葉工業所へ公務の単車を受け取りに行くため第二中学校南側の歩道を軒ぞいに歩いていたら、頭上から爆音と同時にすさまじい閃光がひらめきました。一瞬のうちに爆風によって吹き飛ばされ、地面にたたきつけられ気を失いました。

気がついた時、道路に横たわっていました。起き上がった時、眼前にボロボロに焼けた服の中から皮膚がたれ下がり、血まみれになった人が立っていました。

焼けただれた真黒な顔から目だけが白い穴のように光って見えました。私は「われはどうした、」と叫びました。その人は「土橋でやられた……皆やられた……何が何だかわからん……」と答えました。

“お前！ 大丈夫か！”と声をかけましたが、その人は通りすぎて行きました。

私は無意識のうちに足が我が家にむいていました。

無我夢中でした。土橋、明治橋、住吉橋ときた時市内はすでに火災が発生していました。

市役所から比治山へむかおうとしましたが、猛煙のために目の前が真暗になり、息ができない状態で、進めず引き返していた時、数人の人影をみました。

“そちらへ行つては危ない！”と叫びましたが、その人たちは煙に吸われるように姿が見えなくなりました。

日赤病院の電車通りには負傷者が押し寄せていました。皆“水をくれ”“助けてくれ”といいながら倒れていました。どうすることもできず、運輸部へと急ぎました。

昼前、避難先に着いた時、気がゆるんだのか痛みがどつとおそつてきて、救護所で手当を受け、夕方まで横になっていました。自宅が気になって夕方歩いて我が家へ帰りました。火災から免れた家は崩壊寸前でした。

近くの親類を頼り、その夜泊まりました。

天をこがすかのように市内は赤々と燃え続け、不安な一夜を眠れぬまま明かしました。

被爆後の行動と生活

翌七日、部下や先輩の安否が気になり、責任を果たすため焼け跡を歩き廻りました。中国新聞社と福屋のすぐ近くの先輩をたずねましたが、全滅で焼け落ちた建物の下から白骨がのぞいていました。

全員の遺骨を収容しました。変わり果てた姿に、むなしさがこみあげてきました。

八日は横川、白島方面の知人を探しました。

死んだ母親にすがって乳のみ児が動いていました。夕方引き返した時にはもう、母親の乳房を吸うようにして冷たくなっていました。戦争なのだから仕方がないと自分にいいかせました。

九日は駅附近の部下とその家族をたずねました。息絶えだえだった知人の最後を見届けました。知人の娘さんは行方不明になっていました。

京橋川に立つと、死体が流れ、見渡す一面の焼け野原は照りつづける太陽に異様な臭気が漂い、言葉も出ませんでした。

一〇日から嘔吐と下痢におそわれましたが、責任だけは果たさねばと一心に思いつづけました。

一八日の朝、妻が子どもたちをつれて私の安否をたずねて来ました。妻は、私の衰弱し変わり果てた姿に驚いて田舎で休養するようにすすめてくれたので、その気になり、二〇日に皆と一緒に疎開先へ帰りました。

どっと寝込みましたが、新鮮な野菜を食べ、酒を飲んだのがよかったのか、下痢も次第に治まって、九月には起き上がれるようになりました。

一ヶ月くらい経った後、広島には今後七五年草木も生えないとの噂が立ちはじめ、新兵器原子爆弾だったことを知りました。

昭和二〇年秋より、敗戦の残務整理を一人で引き受け、二一年暮れまでに米軍に引き渡しました。その後、大蔵省に転勤命令が出ましたが、その頃から鼓膜破裂による中耳炎のため、頭痛・耳鳴り

に見舞われるようになりました。一度上京しましたが、健康に自信が持てず転勤を辞退し、田舎で暮らす決心をしました。昭和二二年に次男が生まれましたが、生まれつき虚弱なのが心配でたまりません。その年に両親が妹の遺骨を胸に引き揚げてきました。地元の推選もあり農業会長に就任し、妻には旅館を経営させ、両親は農業に精を出し、ようやく平和を取り戻すことができました。

しかし、昭和二五年頃より私の体力の消耗が激しく根気がつかなくなりました。疲れやすく頭痛・耳鳴りが次第に激しくなり安眠できなくなり、神経衰弱におち入りました。

父は祈禱師をよんだり、願をかけたり、お百度詣りをしましたが、効果はなく私は鎮痛剤を常用するようになりました。

責任を感じ全職をしりぞき、自宅養生をするようにしました。家族への負担を考え入院することになりました。

妻は実家へ五人の子どもを連れて帰り育てることにしました。両親は壊れた家を修理し、住むことにしました。当時は保険も何の医療保障もなかったので、私の治療費に両親は財産の殆どを費やしました。

昭和三二年四月に原爆医療法が制定され、2km以内の被爆者に原爆特別手帳が交付され医療費の負担がなくなりましたので、初めて広島大学病院の診察を受けました。両耳の慢性中耳炎の移植手術を受けました。一時よくなったように思いましたが、再び頭痛・耳鳴り、右耳ジージー、左耳ドクドク、頭ガンガンの三重奏が始まり、安眠できずあちらこちらの病院の入退院を繰り返しました。

昭和四一年に母が他界し、二・三年後失意のうちに私を案じながら父も死亡しました。

ホーム入所前後の状況

長い病院生活の間、私は安眠できないので、夜通し日誌を綴ることが習慣になりました。

被爆以来、不意に何か起こりはしないかと不安になったり、夜すぐ戸外へ出られるように服を用意しなければ心配でたまらなくなったり、歩くときも太陽をさけて陰へ陰へと軒下を歩くようになりました。日赤病院のソーシャルワーカーの加藤禮子さんと面接を重ね話を聞いていただくうちに、少しずつ生きていく自信を取り戻してきました。

身体障害者手帳を受け、補聴器もかけて会話ができるようになりました。加藤禮子さんのすすめで病院からホームへ六二年三月九日に入所いたしました。

やっと安住の地を見出した思いがいたしました。

時々忘れてしまいたい過去のさまざまな事が胸をよぎるとたまらなくなり、つい深酒をしてしまい身体が自由がきかなくなりますが、寮母さんの親身なお世話を受け、本当に有難く思っています。耳鳴り、頭痛ガンガン、ジージー、ドクドクの三重奏も生きている証しのように思われてきました。

昭和五〇年には被爆者を代表し国会請願にも参加しましたが、今後原爆の体験から得たものを少しずつでも戦争が起きないよう、平和に役立つためにつくしたいと考えています。

平成二年三月一八日梶川病院にて急性硬膜下血腫のため死去されました。

合掌

包帯だらけの娘が帰って

玖 島 マサヨ（八五才）

被 爆 地……段原大畑町（爆心地より一・七km）・屋外から屋内へ
当時の急性症状……なし
家族の死亡……なし

被爆前の家族構成と当時の生活

主人は早く死亡し、長男は北海道旭川の軍隊に入隊し、娘（当時一四才）と二人暮らしで編物を教えながら間貸をして生活していました。生活には困りませんでした。

被爆時の状況

裏庭の柿の木の下に野菜を植えていたので、水やりをしていた時に「ピカッ」と光線、それに音がしたので、びっくりして家の中に飛び込んだと同時に床がもち上がり家が見るまに半壊しました。壁にそって八畳間に置いていた救護袋を持って外に出ました。何ごとが起きているのか理解できずにいると、他の人たちが光線で焼けちぎれて素足の人、血だらけになっている人、戸板に人を乗せ医者をつ

訪ねている人たちの姿はまるで地獄でした。

私は柿の木の下から家の中に入ったので、どこにも傷がなく、本当に幸せでした。娘は学徒動員で福屋七階郵便局分室へ出かけていたのでがをしていないか心配で、救護袋の薬を使わず待ち続けました。

被爆後の行動と生活

崩れた玄関の白土塀に風呂場の消しずみで、大州の相原に行くを書いて、迎えに来てくれた相原さんの舟で娘のことを心配しながら行きました。相原さんの家は大きな倉庫があったので、その倉庫の中には畳がひいてあり、その窓から外を眺めながら娘の帰りを待ち続け、私の首がつり首になるほど苦しかった。

夕方六時頃に、頭は包帯だらけで目と口だけ出し、新しい洋服の背中にはぱっくり口を開き、下駄は片方を持ち、素足で娘が帰って来た時の私の驚きは、口ではいいあらわすことができないくらいでした。娘がこんな姿になり、どうしようかと一生懸命介護しました。おかげで傷も治り、元気になりました。段原の家は暇をみつけては、何とかしようと女手一つで頑張っている時、九月二三日に息子が帰り（北海道より）、実弟が九州より帰ってきてこれから寒くなるのでと息子、実弟が再建してくれました。

私は下宿屋を始め、息子は古本屋を玄関の所で始め、二年くらいで中央大学へ戻り、娘も三ヶ月くらいすると元気になり、女子商業高等学校へ通うようになりました。

ホーム入所前後の状況

宇品岡田病院へ一年半入院してなんとか歩けるようになり、腰にはコルセットを使用し、日常生活ができるので退院し、ホームを希望して入所しました。（息子の所へ行くのは迷惑をかけるので）

ホームの生活は病院も隣接しているから安心です。大好きな編物をしながら楽しく生涯を送れると感謝しています。

三男は東練兵場で

藤川 コイマ（九一才）

被爆地……段原大畑町（爆心地より一・七km）・屋内

当時の急性症状……なし

家族の死亡……次女と三男

被爆前の家族構成と当時の生活

大正八年九月九日、藤川逸喜と結婚し三男四女七人の子どもに恵まれました。

長男は中学校の頃、三女は幼い頃病気で死亡しました。

戦争が激しくなりましたので、国民学校三年生だった四女ヨシエを賀茂郡大草町の夫の兄弟宅へ疎開させましたので、夫・長女・次男・次女・三男との六人家族でした。

被爆時の状況

八月六日は夫と長女が具合が悪くカヤをつつて寝ていました。

国民学校六年生の三男に医者の方へ薬を受け取りに行かせました。

二〇才の次女は勤めに出かけ、当時四六才の私はミシンかけをしていました。

パットメガネが黄色になり、それから真っ暗くなり、家がくずれました。二軒長屋で隣がすっかり壊れましたが、私宅はミシンを置いてある部屋の屋根がくずれました。

私は両手で頭をかばい、小さくなってふせました。

家にいた夫と長女は無事でしたが、出かけた次女や三男の身の上が心配でした。

次女は紙屋町付近の市内電車の中で被爆したそうで、ガラスが顔につきささり唇が切れて血だらけでしたし、ひどい火傷でむごい姿でした。気丈な性格なのでひとりで家に帰ってきました。

被爆後の行動と生活

八日に近所の方が三男を東練兵場で見かけたというので、夫と次男と私とで探しに行きました。虫の息で頭髮が全部抜け、顔も見分けがつかぬ火傷でふくれあがっていました。

両手・足のツメが全部指先に直角にはがれて立っており、手をふれるとポロリと落ちました。間もなく息を引きとったので、泣く泣く後頭部にわずかに残った頭髮と爪を持って帰りました。怪我で動けない次女をタンカに乗せて駅へ運び、車内の通路に寝かせました。

芸備線の井原駅へ着くと、青年団・消防団の人たちが待機しておられ、次女を井原小学校へ運んでくれました。

次女はひどい下痢で苦しみ、そこで死にました。

私どもはその後、白木町の実家を頼っていき、家を借り畑も借りて馴れぬ百姓仕事をしました。

四女は大草より井原へ帰ってきたので、夫・私・長女・次男・四女の五大家族は、親類の助けでどうにか食べ物に不自由せず暮らすことができました。

ホーム入所前後の状況

昭和三八年に広島へ帰り、段原の土地は売りました。白島の次男宅へ同居しましたが、その後吉島へ一緒に引っ越しました。

昭和四五年一二月五日に夫が脳軟化症で死亡しましたので、その後は、私は四女宅で暮らすことになりました。四女宅には姑さんもおられ、孫たちも大きくなり家が狭かったので、昭和五〇年九月二二日にホームへ入所しました。

次男からすすめられて昭和五五年一月二三日にホームを退所して、再び次男宅で同居しました。

高齢のため身体が弱ってきましたし、耳がとても遠くなりましたので、自分から希望して昭和五七

年一〇月二六日にホームへ再入所しました。

年寄り同志いたわり合って暮らすのが一番よいと思います。毎日健康に気をくばってお世話していただき穏やかに過ごしています。ありがたいことです。

電鉄の工場の中で

桐原 一（七八才）

被爆地……千田町（爆心地より二・〇km）・屋外

当時の急性症状……全身火傷・全身打撲・発熱・脱毛

家族の死亡……なし

被爆前の家族構成と当時の生活

千田町二丁目に一人で住んでいました。

当時三三才で電鉄に勤め、車の修理をしていました。

被爆時の状況

電鉄に出勤し、工場の青空天上の下で仕事をしていた時、ボーンと音がしたと同時に光線が見えました。そばにはガソリンやオイル等があり、近くでガソリンでも爆発したのかが分からないまま自分は木材の下敷きになっていました。頭はぼーっとしていたが、二日間くらい下敷きのままの状態でした。田舎の家族が探しにきてくれたので、声を上げ呼んで助けてもらいました。その時は、自分では頭の毛は焼け、全身衣類は光線で焼け、全身焼けただれていたように思います。可部の親類宅で毎日塩水で体を冷し、洗ってもらったと思います。治療はどのようなようだったか分からないが、塩水が良く効くと人から聞いてそうしてもらったおかげです。何とか動けるようになりました。

被爆後の行動と生活

三、四ヶ月くらいして広島へ帰って見たが、仕事ができないので親の家に帰り、三ヶ月くらいして千田町の家を六畳くらいの小さなバラック小屋を建てて一人で住み始めました。広島街がみじめな街に変わりはてているとは思われなかったが、結婚し、妻には苦勞をかけました。身体が弱くなり、仕事は肉体労働をして暮らして大変苦しかったけれど、子どもが二人生まれ、人には言えないぐらい苦勞をしたと自分では思います。

ホーム入所前後の状況

妻が死亡して一人暮らしをしていましたが、朝早くから夜遅くまで働くため、洗濯・食事・家のことができなくなり、子どもたち二人ともそれぞれ大変で頼ることができないので、ホームを希望して入所しました。ホームの生活は本当にありがたいことですが、人間関係が大変です。自分は神経質なので、辛いと思いますが自分のことはできるだけ自分で頑張りたいと努力していきます。

夫は遺骨もなく

山 県 ハヤメ（八五才）

被 爆 地……三篠町（爆心地より二・〇km）・屋内

当時の急性症状……なし

家族の死亡……主人

被爆前の家族構成と当時の生活

当時、私の母と主人、肺を病んでいた主人の妹、五人の子どもと当時四一才の私の九人家族でした

が、長女・次女は集団疎開し、長男は学徒動員で横川に行っていました。

主人は郵便局の本局へ勤務し生計を立てていました。

子どもは五人いましたが、昭和二十一年四月に三女が亡くなりました。

被爆時の状況

昭和二〇年八月六日当日は、三人の子どもと母、主人の妹と私の六人が三篠町自宅で被爆いたしました。

私は用事があるので外に出ようと思い、戸に手を掛けた直後にピカッと光り、手と頭にガラスをかぶり、頭からの出血で胸まで真赤に血で染まりました。

頭だけは布でしばらく応急処置をしましたが、あとで聞いた話ですけれど「山県さんはドブが出たので気の毒に助からんじやろう」と話していたということでした。

長男と主人の行方が心配でしたが、その日はどうする事もできず、大芝小学校が救護所になっていたのでケガ人がみんな治療してもらおうとゾロゾロと歩いて行きましたが、そこも被害に会い、治療してもらえなく、とうとう祇園の小学校まで歩いてやっと治療してもらう事ができました。

そこには、火傷がひどく皮膚のぶらさがった人、血だらけの人、人、人であうごめいていました。

そこで日が暮れてしまい、みんな原の避難所へゾロゾロと疲れきった足をひきずり道路を歩いて行つたのです。

被爆後の行動と生活

次の日広島に出てみると焼野原で、自分の家も何もありませんでした。

主人は郵便局の本局へ勤めていましたので探しましたが、結局行方は分かりませんでした。人に聞きますと、防空壕のほとりにたくさん倒れていたとききましたが、主人の遺骨といって誰のものか分からないものを封筒にひと握り入ったものをもらいました。言葉では言いあらわしようのないほどの悲しみでした。

五日間は安佐の原避難所にお世話になりましたが、長くはおれませんので、高田郡井原の主人の里に帰りました。

行方が分からなくなっていた長男と再会でき喜びあいましたが、長男は何と大火傷をしていて歩ける状態ではなく、避難病院へ入院していました。

特に足は骨ばかりになるほどのひどいものでした。



この足で履物をはいて歩けるようになるのかと涙がでてとまりませんでした。

主人の里へ落ち着いたので、疎開していた長女と次女を迎えに行きましたが、主人の里へも長くはおれず、私の実家に帰りましたが、母家は崩れてなくなっていましたので、納屋を改造して住めるようにしてもらい、そこでやっと親子が住めるようになりました。

それからの生活が大変でした。少し持っていたお金はすぐになくなり、疎開させていた少しばかりの物で物々交換をして子どもに食べさせていましたが、それもすぐになくなり、野原の草で食べられる物を探して歩き、何とかして子どもに食べさせたいと思う一念でした。

昭和二十一年五月に田を耕していて後に手があたたつたので気がついたら、背中が平餅ぐらいに膨らんでおり、カリエスにかかっていました。

近所に軍医さんが帰っておられたので、手術をしてもらい肋骨を二本出しました。

私は病気になるし、お金はないし、育ち盛りの子どもはいるしどうしてよいか途方にくれています。

民生委員の人が生活保護を受けるようにと言われ、私も落ちぶれたものだと言われ涙が出て止まる事を知りませんでした。情けなかったですよ。それでも断るわけにはいきませんでした。私は子どもを育てなければいけません。

子どもは次々中学を卒業して広島に就職して行きましたが、女の子が就職をする時、下着の一枚でも買ってやりたいと思いましたが買ってやるお金がなく、なさけなくて今思い出しても涙がでるほどつらい思いをしました。

昭和三〇年に村営の三篠園に調理員として住み込みで勤めました。この時私は、五一才でした。昭和四五年まで勤めましたが、貧血で入院したのと、子どもが辞めるように言ったので勤めを辞めました。

ホーム入所前後の状況

母もなくなり、子どももてんでに所帯を持つて私は一人暮らしをしていました。長男夫婦に面倒をみてもらうつもりでしたが、嫁が若くして下半身不随のため面倒をみてもらえず私も年をとり体が弱ってきて病気がちになり、一人暮らしが不安になり、ホームに入る事を決心しました。

今は何不自由なく、不安も不満もなく幸せな毎日を送らせていただいています。

子どものことが心配で心配で

加 登 鶴 子（七九才）

被 爆 地……段原中町（爆心地より二・二km）・屋内
当時の急性症状……頭部打撲・外傷

家族の死亡……なし

被爆前の家族構成と当時の生活

主人と長女、長男、私の四人家族でした。被服廠に品物を納めて生活をしていましたが、そのうち荷物が手に入らなくなり、品物を納めることができなくなっていました。

私が三四才、夫が四三才、長女八才、長男二才でした。

被爆時の状況

空襲警報が解除になり、暑いので防空頭巾など着ていた物をいろいろ脱いでお茶を飲んでいましたら、バス道路でこまい道を隔てて向いの女子商の運動場いっぱい、そのすごさと言ったら大きいこまいと言われないほど大きな光が落ちたのです。西側が女子商なので東側の裏口である縁側に一歩出た所で爆風がきて動かれなくなりましたので、耳を両手でふさぎ長男を腹に抱えこんでおりました。いつも訓練をしていたのですぐできました。私の頭に瓦がどんどん落ち、家がこわれていききました。爆風がおさまり、光はいつ消えたのかわかりませんが、一瞬でした。長女が「ここにおるから助けて」という声で我にかえり、見ますと一メートル先に右手の手首があるのです。びっくりしガラスと瓦砂の下になっていたところを助けたし、私は私で頭に三ヶ所も怪我をしていましたが、娘を助けることで自分の怪我などかえりみるゆとりはありませんでした。

主人は三〇ヶ所も切って動けなくなっておりましたので、襖を三枚重ね、近所の人にお願ひし、私

と四人で襖の角を持ち、被服廠のわきの小さな横穴防空壕の前に寝かせておきました。

子どものが心配で心配でいそいで家に戻りました。長女が長男を見てくれました。長女は口の右側を三、四センチくらい切っておりました。向洋におじがいるものですから、子ども二人乳母車に乗せて行きましたが、橋などがこわれており、向洋に着くまでに乳母車もこわれてしまいました。向洋に着いたら昼になっておりました。子どもの傷、私の傷を治療してもらおうと東洋工業に行きましたが、断られました。青崎の学校を教えてもらい、治療してもらいました。子どもたちをおじの家に頼み、むすびを二、三個作り、主人の所に引き返しましたが、主人はいませんでした。傷がひどい場合は似島に送られ、それ以外は兵器廠にいると言われ、その頃には日が暮れかけておりました。家に帰ってみると若い人が二人も三人も入って来て「何か着る物はないか」と言うのです。その人たちはみんな腰から上、皮膚がなく、ずるむげで魚の皮をはいだようで赤むげの状態でした。何か着る物とは言っても何もありませんでした。ちょうどおしめを洗ったのがあったので、それを肩に掛けてあげ、またオーバーに木綿の裏が着いていたのですが、あとで思ったらそれもなくしておりましたから掛けて帰ったんだと思います。主人は火傷をしていますんでしたので、兵器廠にいると思い行つたのですが、広くて分からず、その将校さんに尋ねたら、部下に探すように命令してくれたのです。その人は親切な人で一生懸命に探してくれましたので、ようやく見つけることができました。主人の回りは勤労奉仕で来たのでしょうか、女学校の子どもたちの「水をちょうだい、水をちょうだい」という声が今でも耳についてはなれません。

その晩は兵器廠に泊まりました。

被爆後の行動と生活

七日の朝、西の空を見ると真紅になっており、夜通し燃えたのでしょうか。私は知り合いの家に大八車を借りに行き、治療してもらった主人を大八車に乗せて人に手伝ってもらい向洋に連れて戻りました。傷に石炭酸を付けたら化膿しなくなりましたが、長女は化膿し、そこがいまだに黒くなり傷あとが残っています。私の傷は頭なので枕も使うことができないくらいで、大怪我でよく行ったり来たりしたものだと言われました。向洋の指圧さんに指圧をしてもらい、一〇日くらいで良くなりました。そのうち家族みんなが歩けるようになったので、八月三十一日可部の綾が谷に行き、そこには母親がいましたので私たちが行くと大変喜んでくれました。次男も生まれ、夫が五一才の時閑節リユウマチで倒れ、二二年間寝たきりとなり、夫の世話をするために一生懸命重労働をしてきました。ふもとの我家に福王寺さんの荷物が配達されるので、私が背負って山を登り届ける仕事をしていました。子ども三人は小学校の頃から非常に優秀で苦学をして大学を卒業しました。

ホーム入所前後の状況

主人も一七年前に死亡し、私も重労働をしたために現在腰痛で悩んでおり、身体が弱くなるにつれて不安になりました。子どもたちも立派な父親・母親となり、私の役割はすべて果たしてきた気がし、ホームにお世話になることにしました。

ガラス戸がフワーと倒れてきて

山田 シヅ（八七才）

被 爆 地……南段原町（爆心地より二・三km）・屋内

当時の急性症状……ガラスの破片が顔や腕に突きささる

家族の死亡……なし

被爆前の家族構成と当時の生活

私は小学校の頃父親と死別し、母親も一九才の頃死亡しました。私には兄弟姉妹がいなかったのです。南段原町にて一人暮らしをしておりました。

当時私は四二才でした。従姉で師範だった古村に指導を受けて難力の教師の資格をとっていました。第二高等小学校と女子商で難力の教員をしておりました。

南竹屋町でタイプの養成所を開いてタイプストの養成をしておりましたし、弁護士から依頼のタイプの仕事も受けておりました。

被爆時の状況

朝食の後片づけをすませ、衣服を着替えて出勤しようと玄関の次の部屋まで出たその時、ふだんは開けたての難しいガラス戸がフワーと倒れてきました。そのガラス戸の破片が顔と腕に二、三ヶ所突きさりましたが、自分で素早く抜き取りました。

玄関の屋根の瓦がくずれ落ちてきました。何がどうなったか分からず、自分の家だけかと思って戸外に出て見ますと、近所の家もほとんど倒れていました。

隣のおじさんがくずれ落ちた瓦や板塀の上によじ登って「やりやがりましたのー」と何度となく恐ろしそうな顔をされて言うておられました。

私も玄関におりましたら、恐らく助かってはいなかっただろうと思います。

的場の方に出ようとしましたが、まわりの人たちがあちらは火事になっていて危ないから南の宇品の方角に逃げなさいと教えて下さいました。

私は南に向けて歩きました。途中みどり町小学校の衛生室で傷口に葉をつけてもらいました。数多くの負傷者の方たちがおられ、葉はすぐになくなりました。次つぎと多くの人々が目の前で死んでいけるのを見ました。

私の友人の寺田さんも南段原で亡くなりました。

被爆後の行動と生活

南へ南へと歩きながら野宿を二晩しました。比治山の方から血だらけの多くの人たちが段原、的場の方へと歩いておられました。

知人が宇品の方は焼けていまいと言われましたので、宇品の方に行きました。その途中家の下敷になった人に「助けて下さい」「水を下さい」と何人にも声をかけられましたが、自分一人が逃げるのが精一杯でどうしてあげることもできませんでした。

腹がすいても食べる物はなく、道端の鉄道草を生で食べ、飢えをしのぎ命をつなぎました。

宇品に着き、下駄屋の二階で二晩お世話になりましたが、そこも家人が多いため出て行きました。もう一人の知人が宇品に住んでおられたので三晩泊めてもらいました。

食べる物もむすびが日に一つであったのが、二つ、三つと増えていったように覚えています。

段原の自宅のことはどうなっているのか全然分からず、そのまま宇品に家を借りて、持っていた貯金などで家賃を払ったりして生活しました。

ホーム入所前後の状況

終戦後二年くらいたってから、吉島の職業訓練校へタイプを教えに行くようになり、給料も頂き、やっと人並みの生活ができるようになりました。

昭和四六年頃まで勤めていたのですが、とても足元が冷える所だったので退職しました。

眼も疲れるようになり、年に四、五回病院に薬をもらいに行っておりました。他に悪い所もなく、これといった病気もしませんでした。

ホーム入所後は何不自由なく、また押売りを断ることもいらず、安心して過しました。数多くのクラブもあり、私は書道、俳句、生花、カラオケ、音楽と五つのクラブに参加させて頂いております。

私が入所して今まで一番うれしかったことは、毎年一月三日に開催される文化作品展に自分が書きました「書」が張り出されたことです。

昔やっていた薙刀も気候が良くなりましたたらまた習いに行きたいと思っています。

毎日好きなテレビを見て過しています。

ありがたいことと思っております。

屋根瓦が落ちてきて

佐々木 寿子（七〇才）

被 爆 地……己斐町（爆心地より二・五km）・屋内

当時の急性症状……打撲・脱毛

家族の死亡……なし

被爆前の家族構成と当時の生活

父、柳清一は船乗り（住幸丸）で家計をたて生活していましたが、四八才のとき脳卒中で死亡しました。一年ほど乙種の資格を持っていた人を雇って乗りました。船を売るようにしておりましたが、その時は売れませんでした。私と母は京都本山にお参りをしました。そのあと西浦小茅につないでいた船を買いたいという人がおられ、その方に売りました。お金は母の手元に残らず、父の借金払いをしました。そして母は友人のみかん山があつたのでそこに手伝いに行き生活費をいただいて生活していました。母が胃ガンであると知らされ、みかん山へ行くこともできなくなつたので、私はモーターに行き働いて生活していました。母、タケは七二才胃ガンで死亡しました。

被爆時の状況

八時には食事がすみ、屋外で洗濯していました。その時耳の回りをハエがブーンと言つて止つてやんだ、そういう音を聞いたんです。それが飛行機の音でした

そして、あら、おかしいなと思つたら、ピカッと光つたのを見たんです。主人が家の中に入つてけと云うので台所の方へ入りましたら、縁台の上に水屋が置いてあるので、その縁台の間に首をつっこみました。そうしたら屋根瓦が背中へ落ちて来たんです。体をゆすつてやっと首を外に出しましたが、土ぼこりで全然見えません。私の足でいつもは七歩くらいで出られるのにそれが見えないんです。そ

れは瓦の下に土壁が落ちたため、そのほこりで見えなかったのです。そうしたら一五分くらいしてス
ーと静まって出口が見えたので出たんです。

伯母をタンスの下から助け出し、己斐の山へ避難しました。

姑を探しに行った後は自宅で生活しました。そして血尿が二〇日間くらい続き、髪の毛も半分くら
い抜けました。

被爆後の行動と生活

己斐町で園芸店をしていましたが、昭和四八年に夫が交通事故のため膝の複雑骨折をしたので店を
やめました。その後回復し、知人の園芸店に勤めていましたが身体の都合で退め、それからは年金で
生活いたしました。

昭和五六年一〇月、夫は六五才で死亡しました。

夫の四九日をすませ、介抱の疲れで私は倒れました。

ホーム入所前後の状況

昭和三七年、土橋病院に入院四〇日、病名不明。

昭和五六年二月一九日、シムラ外科へ入院となりました。他家にて脳卒中で倒れ、救急車で入院
しました。

昭和五七年一月一日、くも膜下出血。脳動脈瘤手術後意識がなく、一月二五日回復後、初めて手

術を知りました。二月一〇日退院しました。

夫死亡後、一時字品の義弟（夫の弟）宅で生活しましたが、生前より仲が悪かったため気兼ねがあり、四〇年来の友人であります牧田キサ宅へ移りました。牧田宅へ連絡すれば防府の甥宅へ連絡してもらうことになっています。昭和五七年六月二十九日にホームへ入所しました（弟・柳靖人は仕事上外国へ行っているため）。ホームでは毎日健康を願ひ、自分から進んでリハビリを兼ねて食堂に出ています。安心して生活しております。

「どうしたのかわからない」

後 藤 千寿子（八一才）

被 爆 地……南千田町（爆心地より二・五km）・屋内

当時の急性症状……下痢・歯ぐきの出血・吐気・頭痛

家族の死亡……田舎の親戚の子ども

被爆前の家族構成と当時の生活

南千田町で母、娘、田舎の親戚の子ども（県女の教員であり、夏休み中でたまたま登校日で来てい

た女性）、私の四人家族。私は住友銀行紙屋町支店に勤めており、主人は出征していました。私が三六才で母親が五九才、娘一三才、下宿人が二三才くらいでした。

被爆時の状況

空襲警報解除になり、娘がリンパ腺を腫らし通院していましたが、「今日はいかーん」と言い、前日建物疎開に出た者は本日でなくて良いと言われていましたので、勤めに出るため、モンペをはきかけた時に「ドカーン」と光と音が同時に走り、縁側の障子が燃えだしていました。火事だと思い、いつも風呂場に水を張っているので水を取りに行き、もどって来ると障子・雨戸・壁もなくなり、柱だけになっておりました。

ここには危ないと思い、外に出るにも戸が開かず、屋根からは瓦がどんどん落ちてきまして、娘をだきかえこみ玄関でしばらく立っておりました。母親のことを思いだし、声のする方に行って見ると、はしり（流し台）の下に頭をつっこみ、身体は全部出した状態でした。親子三人無傷でした。家の外に出ると、煙がボウボウと立ちこめて、御幸橋のあたりには何もなくなっておりました。どこへ何が落ちたのか、三人はボーッとしばらく立っておりました。近所の人たちも「どうなったのか、どうなったか」と言っていましたら、家の下の修道中学の学生が建物疎開のあとかたづけに行っていたのです。「おばちゃん、ここは僕の学校があったと思うのですが、僕、学校に帰っていますか」と、みんな両手を手前に出し、皮膚がぶらさがり、目が見えなくなったりし、ゾロゾロと帰ってきたのです。

「どうしたアーン」と聞くも「どうしたのかわからない」と言うし、どのようにしていいのかもわからないので、防空壕に連れて行ったのです。警防団の人から重傷患者は似島に連れて行くと聞いたので、御幸橋まで四、五人の学生を連れて行きました。その夜は恐ろしくて家に寝ることができなかつたので、布団を持って土手の下で寝ました。

被爆後の行動と生活

次の日、勤務先の住友銀行紙屋町支店に行くと、駅前支店に来いと張り紙がありましたので、電車を歩いて行きました。電車の線路の両側には多くの死体がありました。今では歩くことができないでしょうが、あの時であったから歩けたのです。一番目についたのが、真黒に焼けた赤ちゃんでした。まさに生地獄という言葉がピッタリでした。

下宿人が帰ってこないのです。タオルをベタベタに水にぬらし、顔・頭に巻き、その上に防空頭巾をしましたが、真夏ですぐに乾きます。そのつど水道水を見つけてタオルをぬらしぬらし、毎日毎日市内を歩き回り探す所もなくなりました。似島に行くしかないと思い、港に行ったところ、似島から親戚の子どもが帰って来たところでした。

ケガも何もしていなく大変喜んだのですが、田舎に帰り、終戦前死亡したそうです。親戚縁者で被爆で死亡したのは、彼女一人だけです。私は一〇日くらいし、頭痛・下痢・吐気・歯ぐきからの出血で気違いになるかと思ひ、もし私が死んだ時にはと娘のことを母に頼みました。生活の方は当時としては恵まれていた方で、田舎に親戚が多く、また母親が田舎の人で食べられる野草を取りに行ったり、

カボチャ等を作ったりし、困りませんでした。終戦後一年くらいし、夫が帰ってきました。

ホーム入所前後の状況

独り暮らしをしていましたが、娘がマンションを買ったのでいっしょに楽しく生活を送るようにしました。婿が脳血栓で倒れ、病院を出たり入ったりし、また娘が心筋梗塞になり、「今晚が山だ」と言われたことがあります。その時に、病人のいる所で私が倒れでもしたらと思い、ホームにお世話になることにしたのです。

ここに来て本当に良かったと思っています。

長男が帰ってこないの

長 山 ユ キ (八三才)

被 爆 地……己斐町(爆心地より二・五km)・屋外

当時の急性症状……ガラスで足を負傷

家族の死亡……長男(誠)

被爆前の家族構成と当時の生活

夫、良雄はメッセンジャーの仕事をしておりました。仕事の内容は、疎開する人たちの荷物を従業員二名と共に己斐駅まで運ぶ仕事をしたり、旅館の仕事も手伝ってくれました。

私は旅館を経営していたので、もっぱら買い出しや、お客に出す食事の支度に追われていました。子どもは三人いました。長男は被爆後数日してから亡くなり、次男は当時小学校三年生で、長女は小学校一年生でした。

被爆時の状況

夫はメッセンジャーに出ており、長男は住宅を壊しに行っていました。私は布団とか衣類を疎開させる準備をしていた時、ドカンときたのです。夫はすぐ帰って来ました。私は足をガラスでちよつと怪我しただけでしたが、長男が帰って来ないので、己斐の電車の通る橋の所で待っていました。一二時過ぎでしたか、長男が帰ってきました。何もかも破壊され、橋も落ちてしまったので、川を泳いで渡ったんだそうです。お隣は床屋さんでしたが、気がついたら近くの電柱が焼けておりまして、その人が登って消してくださいました。私の家は二階建てでしたが、焼けませんでした。近くの三階建ての家が倒れてきまして、二階は全部飛んでしまったのです。下の階は残っていましたが、あの日、あれから雨が降って漏るのです。その夜は近所の婦人会長さんの家に泊めてもらったのです。長男は婦人会長さん宅の三畳の部屋で死んだのです。その夜の食事は外で炊いて家族に食べさせました。お米は

麦の入ったものが配給されておりましたが、幸い旅館をやっておりましたので、少し残っていたのです。

被爆後の行動と生活

旅館は戦後もしばらく続けていました。紙を手に入れて障子を張ったり、家をちょっと直したりして、二階建の旅館のうち、残った下の部屋にお客さんに寝てもらいました。旅館はいつも満員の状態でした。どうして満員かと申しますと、戦争保険とかの関係で、保険会社の人が全部来ていたのです。私も五日前に保険に入っていて、保険金をもらいました。私は客に食べさせなくてはならないので、御飯を炊いて一生懸命にやっているうちに、私の知らない間に主人は本通りの旧道の方にもと旅館だった所を買って、宿屋を始めました。事情がありまして離婚しました。その後再婚して他所に土地を借りて家を建てて旅館をやっていました。夫が他界しました。その後ちょっと旅館をやっていました。旅館は子どもにやって私は独り身になったのです。

ホーム入所前後の状況

独り身になった頃、私は糖尿病にかかっておりまして、松山の姉が来て、養生したらということでした。松山の姉宅に身を寄せたのです。しかしいつまでも厄介になれぬがと思っていたところ、近所の自動車会社のご主人が亡くなり、奥さんも心臓が悪くて、身の回りの世話をしてもらいたいということ、そこで働いていました。約三年働いて広島に帰ってきました。アパートに入っていたのです。

が、そこを取り壊すということで立ち退きになりました。当時私は七才でしたから、養老院に入るのが良いのではないかと思つて、昭和五三年に寿老園に入所し、その後昭和六三年一月一四日にむつみ園に入所しました。現在は体調の良い時は舞踊の練習に行ったり、ホームの一泊旅行などへも参加したり、お蔭さまで穏やかな生活を送っております。

